

富山県

立山町埋蔵文化財

緊急発掘調査概要

白岩藪ノ上遺跡

吉 峰 遺 跡

1981年3月

立山町教育委員会

発刊にあたって

近年、環境整備事業の需要増加に伴う地域開発が各地で進められています。立山町においても地域振興策の一環として開発事業が逐次進められ、自然保護・文化財保護の問題に関して論議される所であります。

このような状況の中で、白岩藪ノ上遺跡・吉峰遺跡のいづれについても土砂採取事業の実施に先立って発掘調査を行なったのであります。調査は白岩藪ノ上遺跡は昭和54年から、吉峰遺跡は昭和46年から行なわれ、両遺跡ともに一大集落跡であることが確認されました。

今回の調査は関係者の御理解と、多数人々の参加・協力を得て、実施することが出来ました。

本書は、過去の生活の場として辿った歩みを、発掘調査を通して具体的にさぐり出し、残された史実の記録として作られました。本書が埋蔵文化財の愛護と研究、そして遺跡の理解に益することになれば幸いに思います。

末文ながら発掘調査に御尽力いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、永年にわたり御協力いただいた関係各位に深く謝意を申し述べます。

昭和56年 3月

立山町教育委員会

目 次

発刊にあたって

例 言

I 遺跡の環境	1
第1図 地形と周辺の遺跡	1
II 白岩藪ノ上遺跡	2
1 地形と調査に至る経緯	2
2 調査の経過	2
第2図 遺跡遠景	2
第3図 地形及び区割図	3
3 先土器時代	4
第4図 先土器時代	4
第5図 第1ユニット	5
第6図 先土器時代の遺物	6
4 縄文時代	7
第7図 縄文時代	7
(1) 遺構と遺物	8
第1号住居跡	8
第8図 遺構と遺物	8
第2号住居跡	9
第9図 遺構と遺物	9
第3号住居跡	10
第10図 遺構と遺物	10
第4号住居跡	12
第11図 遺構と遺物	12
第5号住居跡	14
第12図 遺構と遺物	14
第6号住居跡	14
第13図 遺構	14
第14図 遺構と遺物	15
第7号住居跡	16
第15図 遺構と遺物	16
穴	18
第16図 遺構と遺物	18
(2) 遺構外の遺物	20
第17図 遺構外の遺物	20
5 その他の遺構	21
第18図 その他の遺構	21
6. まとめ	22
(1) 先土器時代	22
(2) 縄文時代	22
厳照寺I式土器について	22
竪穴住居跡と集落の変遷について	23
III 吉峰遺跡	24
1 過去の調査と経緯	24
第19図 遺跡遠景	24
第20図 第3・4次調査	24
2 調査の経過と遺構	25
第21図 地形及び区割図	25
第22図 遺構概略配置図	25
第23図 発掘区全景と調査状況	26
3 出土遺物	27
(1) 土器	27
第24図 出土遺物	27
第25図 出土遺物	28

(2) 石器	29
第26図 出土遺物	29
4 まとめ	30
参考文献	30

表1 白岩藪ノ上遺跡遺構計測表

付図1 立山町白岩藪ノ上遺跡遺構分布図

例 言

- 1 本書は、富山県立山町において実施された、民間の土取事業に伴う立山町白岩藪ノ上・吉峰遺跡の緊急発掘調査概要である。
2. 調査は、国庫及び県費の補助を受け、立山町教育委員会が主催し、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて実施された。
3. 調査期間は次の通りである。
白岩藪ノ上遺跡
第1次調査 昭和54年11月16日、第2次調査 昭和55年6月2日～同年8月19日
吉峰遺跡
昭和55年8月27～同年9月9日
4. 調査参加者は下記の通りである。
白岩藪ノ上遺跡
第1次調査 富山県埋蔵文化財センター山本正敏(調査担当)
第2次調査 富山県埋蔵文化財センター酒井重洋・神保孝造
(以上調査担当)・山本正敏(調査員)・有馬明吉・山村郁郎(以上調査補助員)、地元岩本義松・織田耕一・富川正子・和田あき子・和田あつ子・田島れい子・白川栄子・白河百合子・小池幸子・小池スミエ・本多ヒロ・白石つた子・高橋照子・伊東三重・伊東君子・薄田ヤイ・村上ミドリ・橋場クニエ・山下百合子・荒木芳子・大畑和枝・大畑ミキ・大畑スミ・長川フジイ・長川ミツエ・藤畑コト・柳原キヨ子・城戸美智子・堀幸子・和田ミツ子
吉峰遺跡
富山県埋蔵文化財センター酒井重洋・神保孝造(以上調査担当)
有馬明吉(調査補助員)、地元 中村佐七・中川健次・荒木三郎・広海清・宮本幸一・柴田キヨシ・中村久枝・広海ミツエ・中川ハナ・粕谷キヨ・柳沢キクエ・堀ソノ子・成瀬キミ・村田ハナエ・応矢民子・柴田しげ子・草間和美・永原文子・安川幸子・佐伯和子・成瀬フミ子・荒木昌子・山本フミ子・相山清子・松島芳子
調査事務局は、立山町教育委員会に置き、庶務は課員の協力を得て社会教育課主事奥村和男が担当し、同課長荒木慶一が総括した。
5. 調査期間中、地元岩本晃・中川健次・中村佐七氏には、連絡所及び飲料水の提供を受けた。記して謝意を申し上げる。
6. 今回の整理・編集・執筆は、所員の協力・助言を受け、酒井・神保・奥村吉信(富山県埋蔵文化財センター)が分担して行ない各々の責は文末に記した。
7. 本書に掲載した実測原図は、酒井・神保・山本・奥村・有馬が作成し、神保・奥村が整理・作図した。写真は、遺構を酒井・神保が撮影し、遺物写真は橋本正春(富山県埋蔵文化財センター)が行なった。

I 遺跡の環境

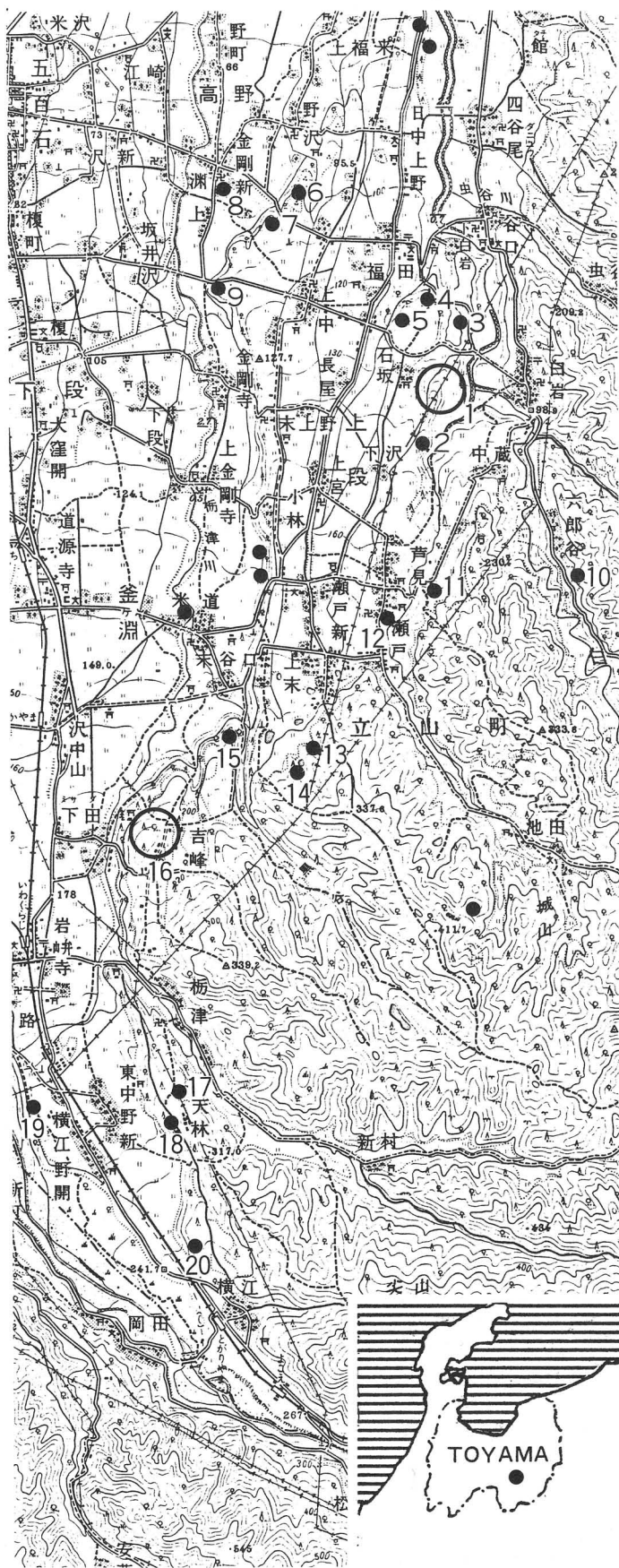
立山町は富山県のほぼ南東部に位置し、上市町・舟橋村と共に中新川郡に属する。

地形は変化に富み、町の北西部は、飛騨山脈西北部立山連峰に源を発する常願寺川と、大辻山に端を発する白岩川によって三角洲を形成する。その南には、町の中心地、五百石の所在する常願寺川扇状地が続く。さらに東側は、旧の常願寺川扇状地が隆起して形成された河岸段丘の地形を呈する〔三鍋 1977〕。今回、発掘調査を実施した白岩薮ノ上・吉峰の両遺跡は、その右岸段丘上に立地している（第1図）。

常願寺川右岸の河岸段丘は、最近の地質学の研究〔松田 1980〕によれば、段丘の連続性・配列及びテフラから見て形成順で七つに大区分され、さらに現河床との比高差等により十数段に細分されるという。この成果に一带の遺跡分布を重ねると各々の段丘上には、県内でも著名な遺跡が並ぶ。吉峰遺跡（先土器・縄文早期～晩期）がの第2位の上野面〔松田 1980〕（標高300～200m）には、天林北（縄文早、中～晩期）・横江天林（縄文早～中期）遺跡が立地し、その最下位面に当る上段々丘には、白岩薮ノ上遺跡（先土器・縄文早～中期）を始め白岩尾掛（縄文草～前・後期）、白岩古高（縄文中期、奈良・平安）〔橋本 1981〕、白岩月平（縄文中期）の各遺跡がある。さらに、第4位粟巢野面〔松田 1980〕に属する下段々丘（標高150m～50m）上には、金剛新（縄文中～晩期）〔山本他1976〕、野沢狐幅（縄文中期）・野沢苦情池（縄文中期）・竜ヶ浜（縄文中・後期）の各遺跡〔橋本 1979〕が並ぶ。また、時代は下がるが上記の上段々丘には、陶土が産出するため上末・法光寺谷といった、奈良～平安時代の古窯跡群〔酒井 1979〕や、安土・桃山時代から現在まで断続的に焼かれる越中瀬戸の古窯跡群が分布している。

このように、常願寺川右岸の段丘上一帯は、断続的ではあるが、先土器時代から現代に至る時代を通し、人々の生活の場として適した環境を有していたものと思われる。

（神保）



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

1. 白岩薮ノ上 2. 白岩尾掛 3. 白岩月平 4. 白岩古高
5. 石坂助地沢 6. 野沢狐幅 7. 野沢苦情池 8. 金剛新
9. 竜ヶ浜 10. 六郎谷 11. 芦見 12. 越中瀬戸焼古窯跡群
13. 法光寺谷窯跡群 14. 上末古窯跡群 15. 末谷口 16. 吉峰
17. 栃津新宮社 18. 天林北 19. 横江中ノ林 20. 横江天林

Ⅱ 白岩藪ノ上遺跡

1. 地形と調査に至る経緯

地形 遺跡は、富山県中新川郡立山町白岩字藪ノ上4の1に所在する。標高は約134mを測り、地形的には上段々丘面の北東縁辺部にあたる。東を和田川、西を尾掛川がそれぞれ北流し、遺跡はその中河川が段丘を開折して形成した舌状台地上に立地する。この舌状台地は、東西約100m、南北約1kmと南北に細長く、その先端部分に当遺跡が広がる。また、その基部には、縄文時代草期～前期・後期の白岩尾掛遺跡が立地する。

遺跡の現況は、葛の根等がはびこる荒地で、南北にゆるく傾斜する。一部、畑地のうね跡を残す所があり、数年前までは畑地であったらしい。

調査に至る経緯 立山町地内には、県内でも著名な遺跡が多い。この事は、前章で記したとおりである。これは、以前から一帯をフィールドとして調査活動をされていた安田良栄氏を始め、幾多の人々の調査成果に負うところが大きい。白岩藪ノ上遺跡は、いつ世に知られたか不明だが、近年、安田氏はこれまでの成果を立山町史の中でまとめられており〔安田 1977〕、その中で白岩地区一帯の遺跡と共に当遺跡が紹介され現在に至っている。

昭和54年、当遺跡一帯で民間による土砂採集事業が計画された。この計画は、遺跡の立地する台地の基盤に厚さ約10mの礫層が認められるため、これを主に採土するものであった。その規模は、台地先端部よりやや奥まった約6,000㎡で、単年度で土取りするものである。これを知った富山県教育委員会と立山町教育委員会は、早々関係機関との協議を重ね、昭和54年11月には、第1次調査を、昭和55年6月～8月には、第2次調査を実施し、これに対処した。

2. 調査の経過

第1次調査 遺跡の範囲確認と遺構・遺物の遺存状況を握む予備調査である。調査では、土取り対象地域へ重機械による八本のトレンチを設定した〔山本 1980〕。その結果、調査地域一帯で遺物が 散発的に出土し、特に台地中央



第2図 遺跡遠景（北より）

部約 650㎡では、土壇もしくは住居跡と思われる遺構と共に遺物が出土した。総発掘面積は約1,200㎡である。

第2次調査 前述した経緯のもと昭和55年6月2日～同年8月21日に実施した記録保存調査である。

調査は、第1次調査の成果をふまえ、台地全域へ東西80m、南北120mのグリッドを設定した。調査対象地は、当初台地中央部約650㎡とした。しかし、一帯は荒地のため人力による表土排土が困難であり、その作業に重機械を用いた結果、新たな遺構・遺物集中地点が確認された。このため、台地全域約6,000㎡におよぶ調査を実施することとなった(第3図)。

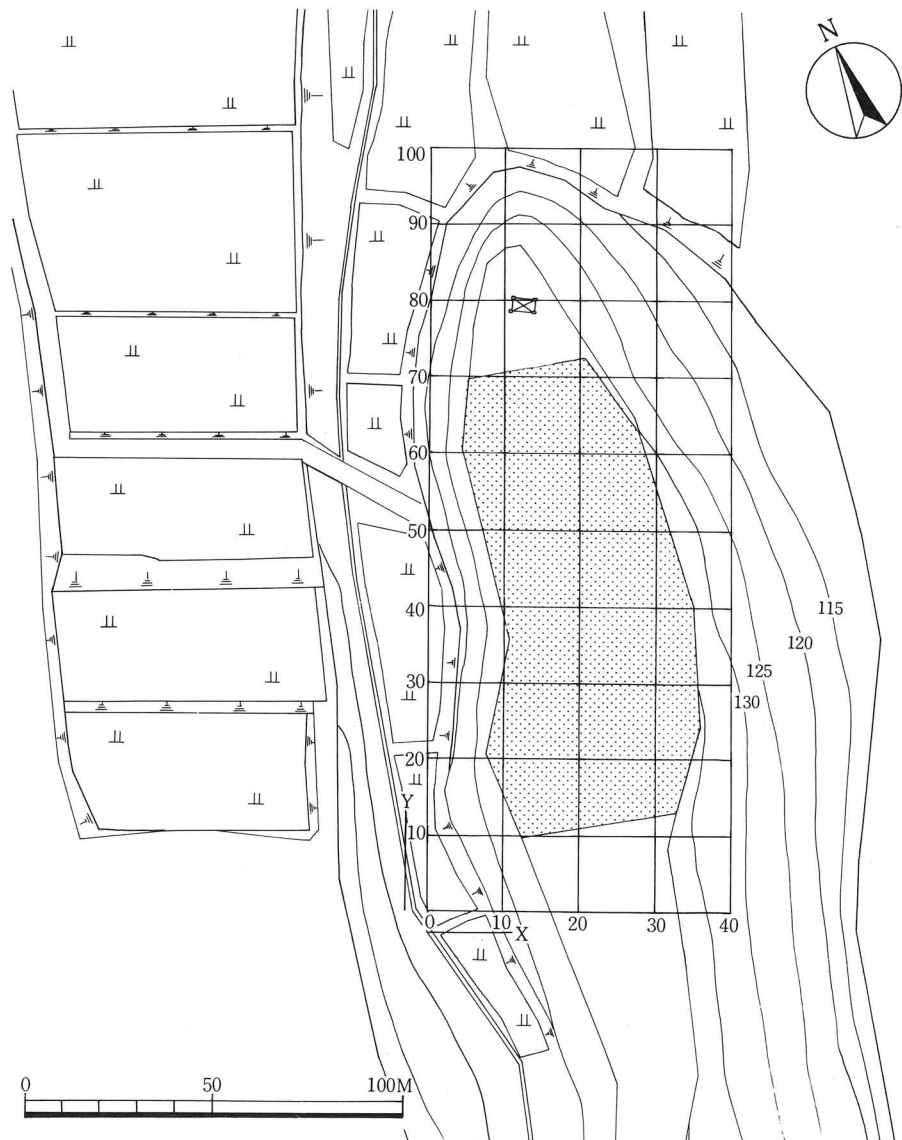
調査では、遺物の出土状況が散発的であるため、1区画を10m×10mの大区画として、表土排土後の区を一気に遺構確認面(黄褐色粘質土)まで掘り下げた。その結果、調査地区全体で竪穴住居跡7棟、穴35個を検出した(付図1)。

一帯の層序は、比較的単純で1層は暗茶褐色の表土層(15cm～20cm)、2層は黒色土層(10cm～15cm)で調査区北側と西側にある小さな鞍部のみで確認された。3層は暗褐色土層(5cm～10cm)で、次の地山(黄褐色粘質土)へ至る漸位的な層である。このうち、遺物包含層は、2～3層であるが、その量は少なく、出土した遺物の大半は、住居跡の覆土中へ集中する傾向が認められた。住居跡覆土の遺物は、細片でまとまりのあるものが少ない。その出土状況はいわゆる吹上パターン[小林1968]ではなく、その廃棄にあたってはある種のかたづけ行為[橋本1971]がはたらいたように思われた。

以後、調査は、遺構単位での調査、全体の写真撮影・遺構実測と進行したが、その間、台地東側部分を中心に先土器時代の石器が出土したため、地山上面での調査完了と同時にその調査を実施した。

調査では、台地全体へ幅1m～2mのトレンチを七本設定し、地山層内における遺物の有無を確認した(第4図)。その結果、台地東側縁辺部沿で、四カ所の遺物集中地点を検出した。これを北から第1～4ユニットと呼称し、調査を進めたが、調査予定期間の後半でもあり調査期間に制約が生じたため、関係者間の協議のもと第1ユニットは、今年度調査し、他のユニットについては来年度の継続調査となった。

(神保)



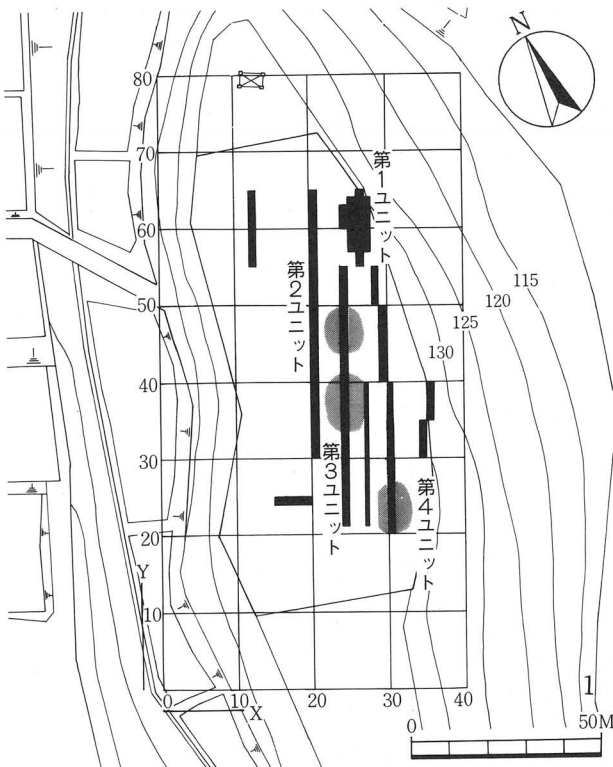
第3図 地形及び区割図 (1/2,000)

3. 先土器時代

試掘トレンチを設け調査した結果、四ヶ所でユニットを確認した(第4図1)。南北に細長くのびる台地の東側の縁近くに、ほぼ一列に並んで分布している。北側から順に第1～第4ユニットとした。

縄文時代の遺物包含層は第2層である。それを取り除くと暗赤褐色の第3層が部分的に認められた。第4層は赤褐色粘質土で厚さは約30cm、第5層は黄褐色粘質土で厚さは約25cmである。先土器時代の遺物はこの第4層から第5層上半部にかけて包含されていた。

第1ユニット(第5図、第6図2) X26～28, Y58～64区にかけて分布しており、その広さは南北11m、東西6mであった。遺物はX27, Y62区を中心とした径5mの区域に集中し、その周辺では散漫に分布していた。



1. 発掘区とユニット分布図 (1/2,000)

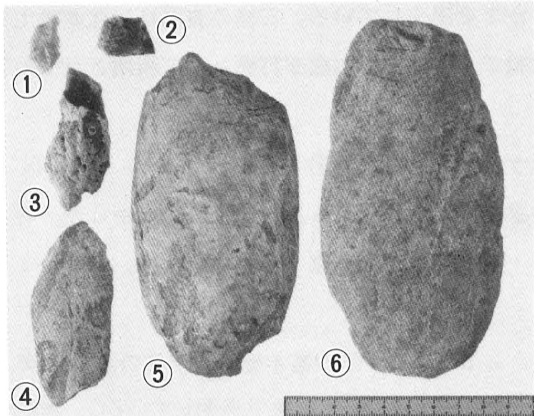


第4図 先土器時代 2. 発掘区全景 (南より)

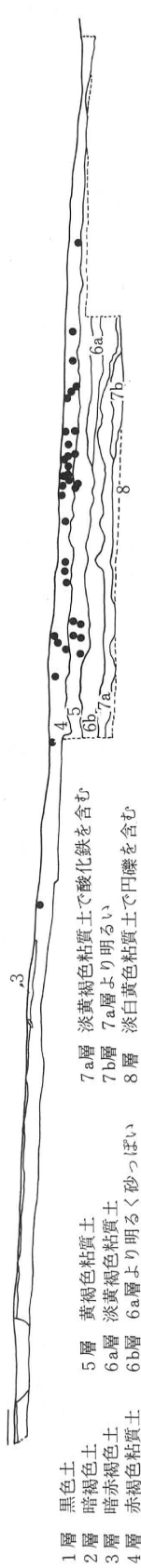
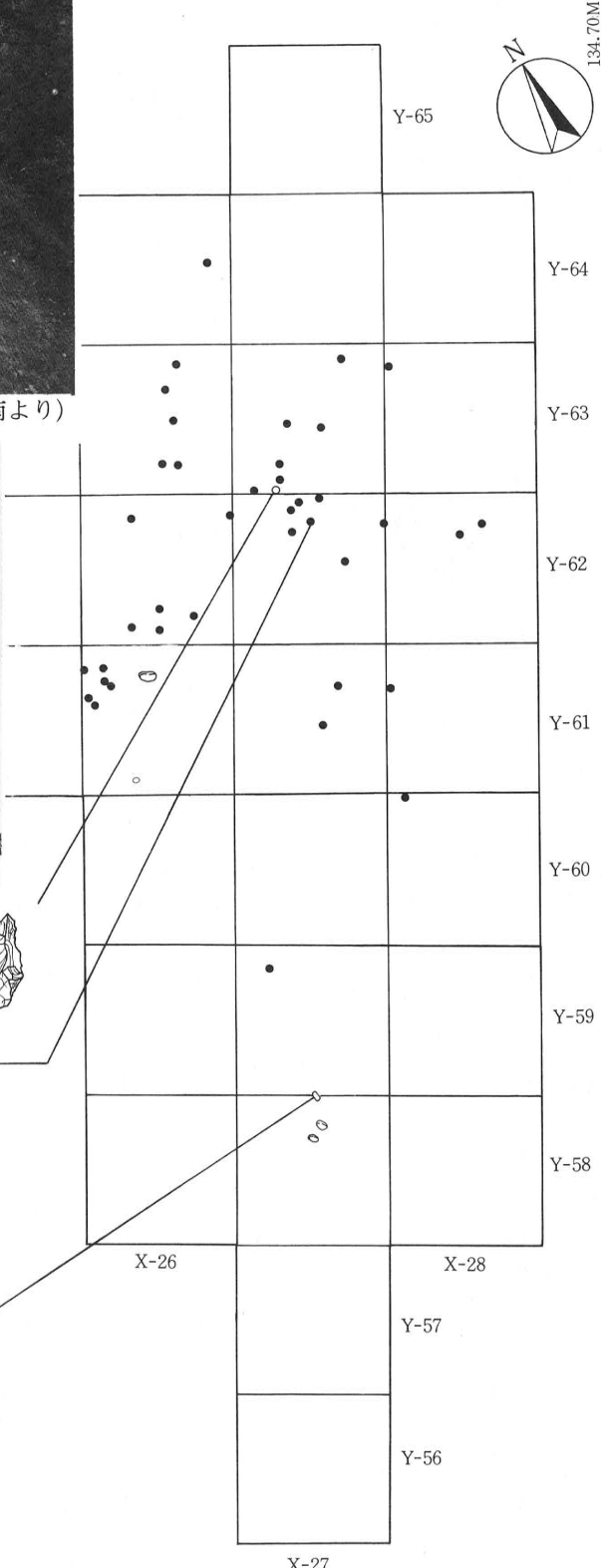
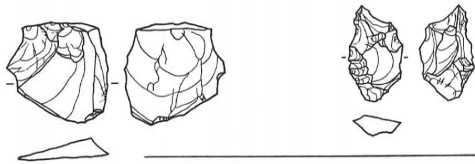
第1ユニット出土の遺物総数は41点である。石質別に分けると、メノウ33点、黒曜石2点、鉄石英1点、蛇紋岩1点、不明4点となる。ただし、黒曜石片のうち1点は二次加工面と折面の観察及び出土層位より、縄文時代に属する石鏃の破片の可能性が強い。大多数を占めるメノウは、少なくとも9母岩に分けることができたが、接合はX26, Y61区内で背面に外皮を持つ剥片が接合した一例のみであった。石器組成は錐状石器1点、分断手法による折断剥片2点、局部磨製石斧1点、石核2点であり、その他は剥片である。錐状石器(第5図①、第6図2の①)の素材はメノウの不定形な剥片である。一側辺のみに二次加工が施され、鋭利な先端部が作出されている。分断手法による折断剥片は(第5図②・③)、いずれもメノウが素材となっている。②は石刃の下半が背面より折断され、結果として台形状に成形されている。両側辺が鋭利な刃部と考えられる。③は背面に外皮をもつ比較的大きな剥片が素材である。打面側が背面より折断され、一縁辺に鋭利な刃部が残されている。ただし、腹面に二面の剝離痕があり、剥片素材の石核とも考えられる。局部磨製石斧は(第5図⑥、第6図2の⑦)、蛇紋岩の礫が素材となっている。中央部で最大幅をもち、全体はほぼ長方形に成形されている。刃部は両面から研磨され、鋭利な蛤刃状の刃先となっている。側辺と基部に成形のためと考えられる数回の剝離が施されている。石核は2点とも剥片がとりつくされた残核である。平坦面か自然面が打面となっており、種々の石核調整は観察されない。最終剝離痕は長さが約1cmで寸づまりの剥片が剝離されている。剥片は長幅比が1:1に近い寸づまりのものが多く、また、打面は平坦打面であり、背面の剝離方向は一定していないものが多い。これらの特徴は石核の観察と一致する。



ユニット全景 (南より)



ユニット内出土の石器 (1/3)



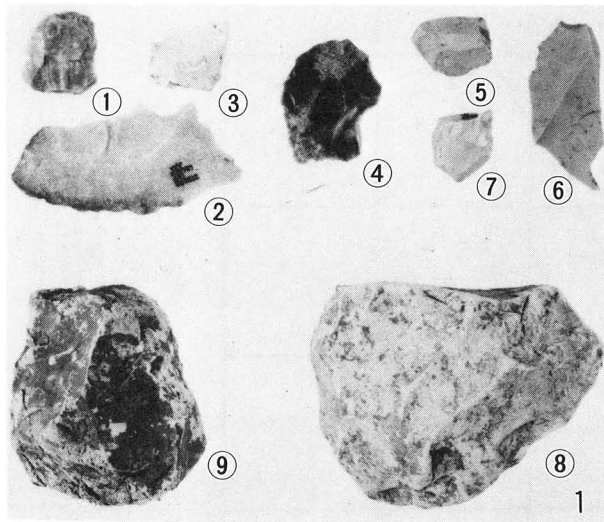
1層 黒色土
 2層 暗褐色土
 3層 暗赤褐色土
 4層 赤褐色粘質土
 5層 黄褐色粘質土
 6a層 淡黄褐色粘質土
 6b層 淡黄褐色粘質土
 7a層 淡黄褐色粘質土で酸化鉄を含む
 7b層 7a層より明るい
 8層 淡白黄色粘質土で円礫を含む

第5図 第1ユニット (1/100)

その他に、第1ユニットには局部磨製石斧が2点含まれると考えられる。第6図2の⑥(第5図⑤)はX28, Y64区の第1層から出土している。蛇紋岩製で、全体が細長い楕円形状に成形されている。断面が凸レンズ状を呈するように両面が見事に磨きあげられており、刃部も鋭利な仕上げとなっている。第6図2の⑤(第5図④)はX28, Y55区の第1層から出土している。局部磨製石斧の破片であるが、側面に数回の剥離が施されており、新たに石器として成形された可能性がある。

第2ユニット(第6図1の③~⑤) X25, Y47区から4点の遺物が出土しており、この区を中心に分布していると考えられる。メノウの石核が2点、分断手法による折断剥片が1点、安山岩の細片が1点である。分断手法による折断剥片は③, 上下が折断され台形状に成形されている。石核からは、第1ユニットと同じように平坦打面ですづまりの不定形な剥片が剥離されている。

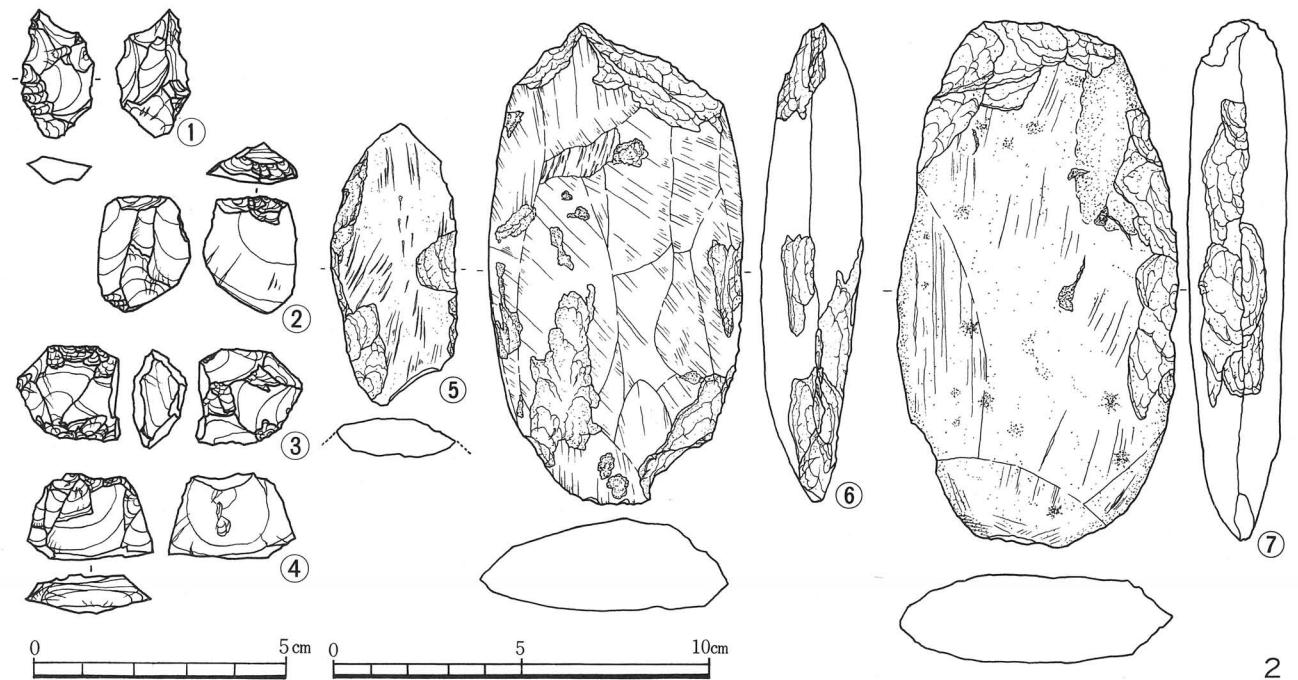
第3ユニット(第6図1の⑦・⑧) X25, Y38区から安山岩の石核が1点(⑧), X25, Y41区からメノウの剥片が1点出土している。石核の表面は風化が激しい。礫が素材で、任意の平坦面が打面として利用されている。



第4ユニット(第6図1の①・②) X31, Y23区から5点の遺物が出土している。安山岩の石核が2点、頁岩のピエス・エスキーユが1点(第6図2の③), 剥片が2点である。

その他に、X29, Y53区の第4層から風化の激しい安山岩の石核(第6図1の⑨)が単独で出土している。また、表採でナイフ形石器(第6図2の②)が1点ある。頁岩製剥片の打面側が折断され、そこにインバース・リタッチが施されている。先端にもわずかに二次加工が施されている。いわゆる立野ヶ原型ナイフに含まれる。(奥村)

1. 先土器時代の石器 ③~⑤第2ユニット, ⑦・⑧第3ユニット, ①・②第4ユニット, ⑨X29・Y53, ⑥表採



第6図 先土器時代の遺物

2. 先土器時代の石器実測図(①~④ 2/3, ⑤~⑦ 1/2) ①・④・⑥・⑦第1ユニット, ③第3ユニット, ⑤X28・Y55, ②表採

4. 縄文時代

遺跡は、南北に細長い舌状台地上に立地する。遺物は、台地上に薄く堆積した黄褐色土と鞍部内に堆積する黒色土層内から縄文時代早期・中期の土器・石器が少量出土した。また、遺構の覆土からの遺物出土は少ない。このことは、縄文時代中期前葉、同一時期にみられる遺跡（竹林Ⅰ・厳照寺）〔神保他1979・76〕の住居跡などの遺構内に遺物の廃棄を行なう事例とは異なる。また、遺構覆土内から出土する土器は、厳照寺Ⅰ式・同Ⅲ式〔神保1979〕が混在して出土する。このことは、集落内での遺物のありかた（かたづけ・廃棄のパターン）を考えるうえで重要な意味があろう。また、遺跡の存続期間にくらべると遺物の出土量が極めて少なく崖斜面などへの投棄が行なわれた可能性がある。この事例は、竹林Ⅰ遺跡などに顕著に認められる。

住居跡は、台地の端部に1～2棟づつ検出され、西北側に第3・4号住居跡、北東側に第1・2号住居跡がみられる。第1号住居跡の北側は、小谷となる。また、第5号住居跡は、東側端部に、第6・7号住居跡は、南西側に位置する。この単位は、住居跡の同時性を表わすものではないが、台地中央部をさけており、広場の可能性をもつ。また、穴は、住居跡の周辺と、台地東端部に散在する。住居跡の主軸は一定しないが、同一方位をとるものもみられる。

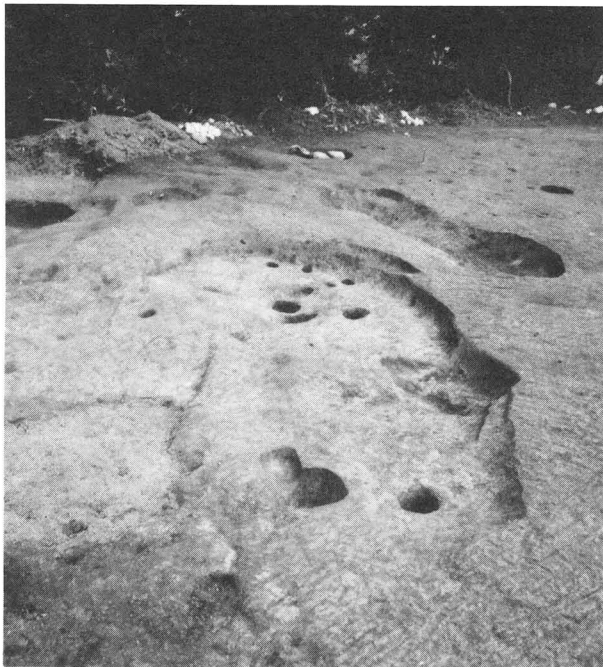
縄文時代早期の遺物はX35Y36付近とX38Y37付近から出土した。前者は、台地が東へはり出した部分で、焼土を含む黄褐色土内から3m×2mほどの範囲で出土した。また、この焼土内からは、炭化した木の実（約5mm）が多数出土している。プランは、検出できなかったが、何らかの遺構の可能性をもつ。遺物は少ない。（酒井）

註①まとめて後述するが、いわゆる厳照寺Ⅰ式〔神保1977〕とは、その器形や文様・成形技法において若干の差異が認められる。この土器群は、厳照寺Ⅰ式でもより新しい要素をもつものであり、以後、遺物説明に用いる同型式名は、そうした土器群を示す。



第7図 縄文時代

発掘区全景（北より）



住居跡全景（西より）



住居跡全景（北より）



第8図 遺構と遺物 東壁細部

(1) 遺構と遺物

第1号住居跡（第8図，付図1，表1）

住居跡は、X21 Y67付近の鞍部中腹にあり、北壁・西壁が切土を受け判然としない。残存部から住居のプランを推測すると、6.7m×3.9mの長円形住居跡になろう。住居跡の主軸は、N-46°-Wで第3号住居跡とほぼ同一軸方位をとる。

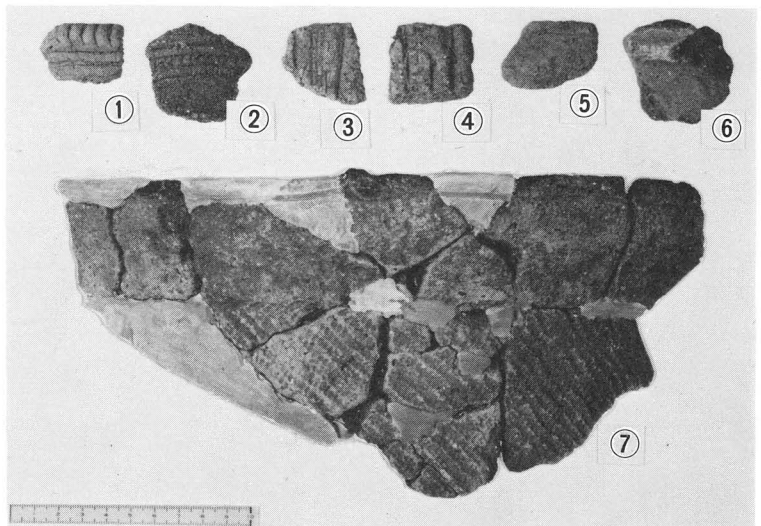
主柱穴は、P₁~P₆で6本主柱Y型〔橋本 1976〕の配列をとり、床面から35cm~60cmの深さを測る。P₄は、いわゆる風倒木痕〔能登 1974〕で切られる。

炉は、単設式地床炉〔橋本 1976〕で、住居跡ほぼ中央部に位置し、焼土が約6cmの厚さを測る。炉構築の際は、通常床面を多少掘り下げるものであるが、当遺跡の場合は床面直上（地山面）から焼土が盛り上る。また、炉の南西方向には、不整形形で、漏斗状に掘られた穴がある。63cm×45cmの規模で、深さ約68cmを測り住居跡の主軸上に位置する。さらに、東壁沿には周壁造作に関する杭跡風の小穴3個がある（第8図左下）。

住居跡の覆土は、暗褐色を呈し切土のため約20cmと薄い。覆土内の遺物は少量で、総じて中期前葉の土器片である（第8図①~⑦）。

出土した土器は、巖照寺I式（⑦・⑧）と同III式（①・⑤・⑥）である。⑦は、口唇部内面を肥厚させ、同外面には粘土帯を貼り付け、半截竹管文を横走させる。①は、口唇部内面を肥厚させ、半截竹管文を施し、口唇部外面に鋭角な爪形文を施す。⑤は浅鉢形土器の、⑥は有孔鏢付土器の口縁部片である。

（神保）



出土遺物（1/3）

第2号住居跡（第9図，付図1，表1）

住居跡は，X25Y61付近，台地東側端部に，先土器時代のユニット（第1ユニット）を切り込んで作られ，第1号住居跡の南約10mに位置する。壁は，北側で切土を受け判然としないが，南側で最大壁高（20cm）を測る。

平面プランは，6.6m×4.7mの長円形を呈する。主軸は，N-31°-Eで第6・7号住居跡に似る。

主柱穴は，P₁~P₈で8本主柱Y型の配置をもつ。

炉は，単設式の地床炉で住居跡のやや南側に位置する。焼土は，固くしまったブロック状を呈し，厚さ約10cmで床面より盛り上った状態で検出された。また，住居跡の主軸方向北側に漏斗状で円形の穴がみられる。穴は，直径約1m，深さ40cmを測る。

住居跡には，北西側と東側に第32・35号穴が重複するが前者は，住居跡より新しく，後者は古い。また，第3号穴は，住居跡に付属すると思われる。

遺物は，住居跡の北側から多く出土したが総量は少ない。

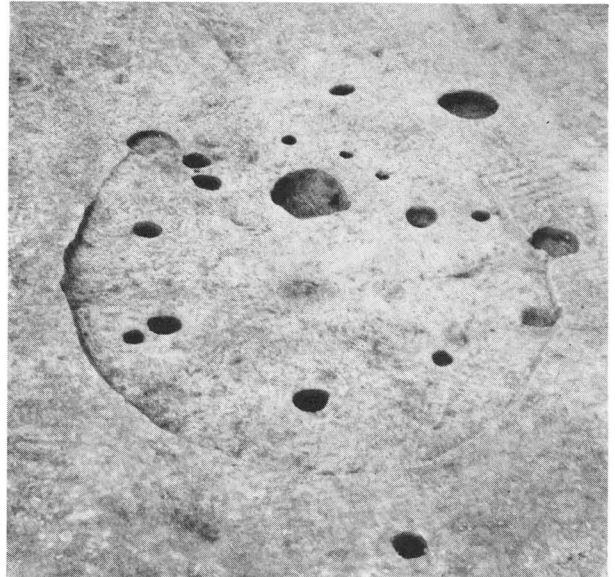
土器は，縄文時代中期前葉に位置づけられる厳照寺Ⅰ式（第9図5の②~⑥・⑧）と，同Ⅲ式（同①・⑨）があり小片が少量出土した。

①は，口縁部外面に粘土紐を縦に二条貼り付け，半截竹管を上からあて，三叉文を横に描き小突起とする。また，口唇部内面に不鮮明だが半截竹管をあてる。⑧は，口縁部下にみられる格子目文様で，①・⑧は，いずれも，キャリパー状の器形となる。②・④は，口唇部外面に粘土紐を貼り付け隆帯を作り出し，器面・隆帯上に縄文を施す。

③は，口縁部に幅3cmほどの無文帯をもち，押圧縄文を施した下部は縄文となる。⑤・⑥は，蓮華文を描くもので，半截竹管により刻む⑤と棒状の工具で押圧して刻む⑥の両者がみられる。

石器は，窪んだ自然石を利用したいわゆる石ランプ形石器⑩，断面台形の細長い河原石の角を利用した擦り石，楕円形の河原石を利用した凹石がある。

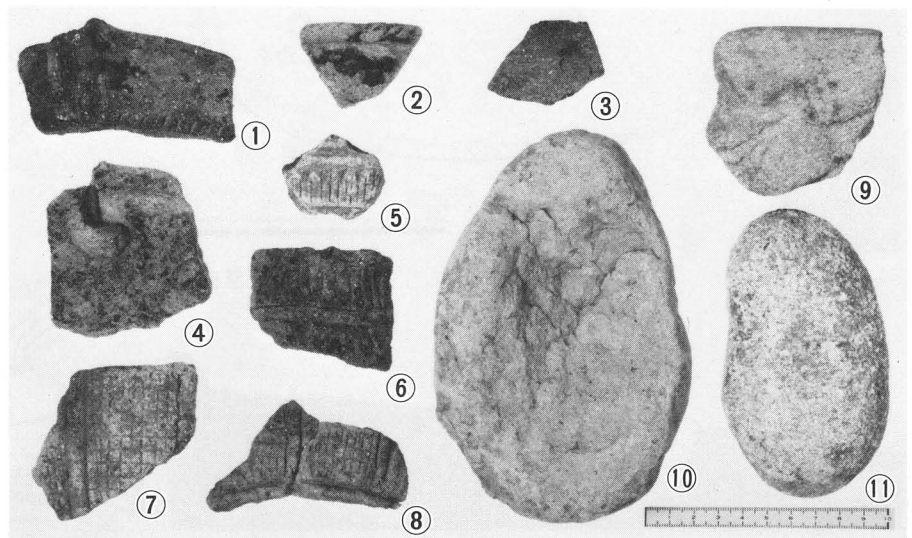
（酒井）



住居跡全景（南より）



遺物出土状況



第9図 遺構と遺物

出土遺物（1/3）



1. 住居跡全景 (北より) 2. 遺物出土状況

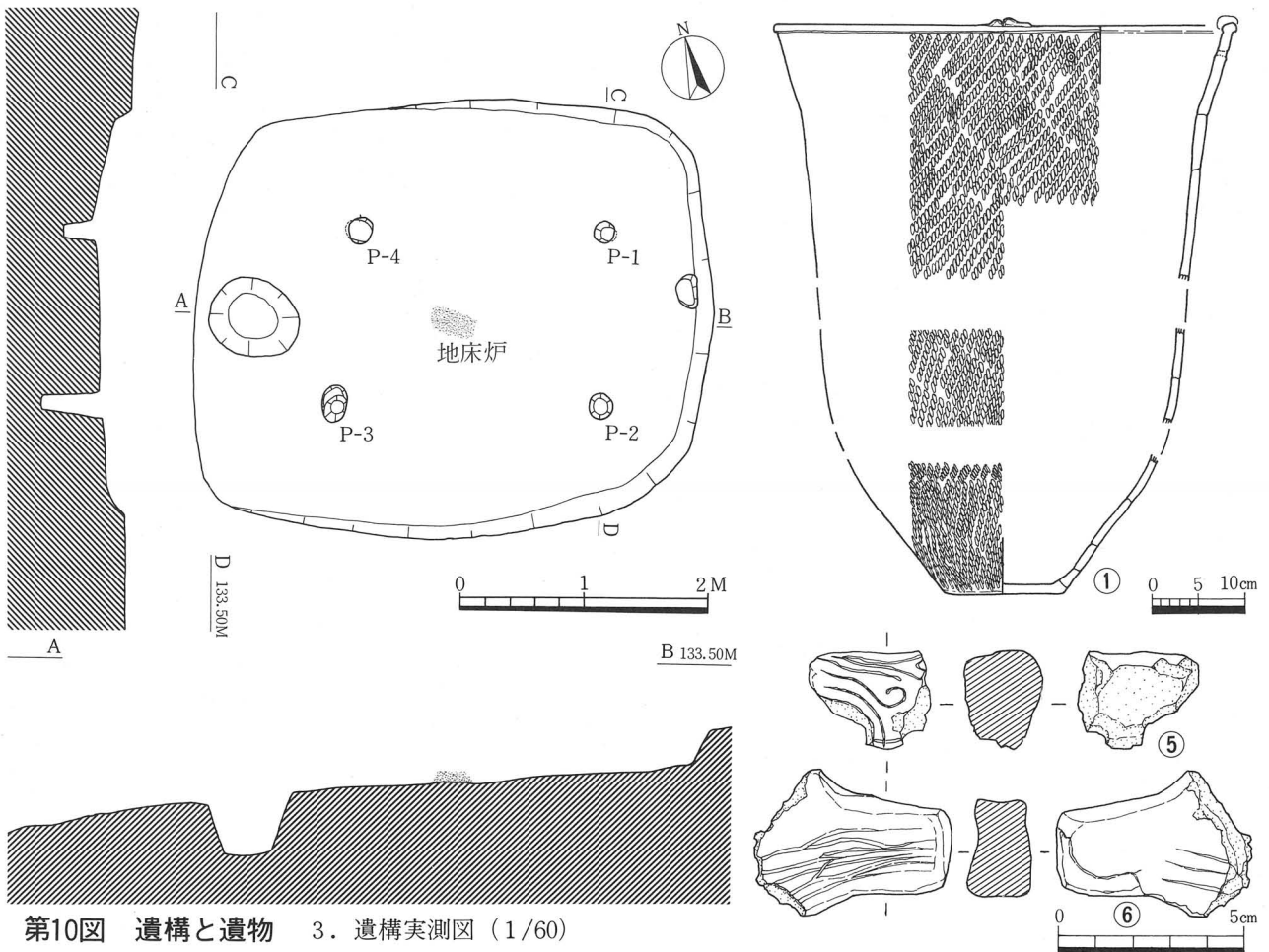
第3号住居跡 (第10図, 付図1, 表1)

住居跡はX10Y58付近, 台地北西側の緩斜面に位置する。西壁は切土のため消失するが, 他の周壁はほぼ遺存しており, 住居跡は4.1m×3.5mの方形プランである。住居跡の主軸は, N-70°-Wの方位をとり, 第5号住居跡と同一方位である。

柱穴はP₁~P₄で, 4本主柱X型の配列をとり, 床面から32cm~46cm掘り下げている。その径は, 他の住居跡に比べ細く, 当住居跡の性格と他のそれとの異質性を暗示する。

床面は, ほぼ平坦で西へやや傾斜する。全体にしまりが弱く, これに直交し周壁が立ち上る。周壁は判然としない。ただ, 床面を検出し清掃した段階では東壁沿に幅5cm程度の溝状の掘り込みを確認した。

炉は, 住居跡のほぼ中央部に位置し, 40cm×20cmの規模をもつ単設式地床炉である。焼土は, 約6cm程床面から盛り上っており, あまり焼けてはいない。炉の北西には, 住居跡の主軸上にある73cm×63cmの長円形を呈した穴がある。その深さは約43cmを測り, 漏斗状に掘られる。穴の北側は, 風倒木痕と重複する。この他, 当住居跡の北側と東側



第10図 遺構と遺物 3. 遺構実測図 (1/60)

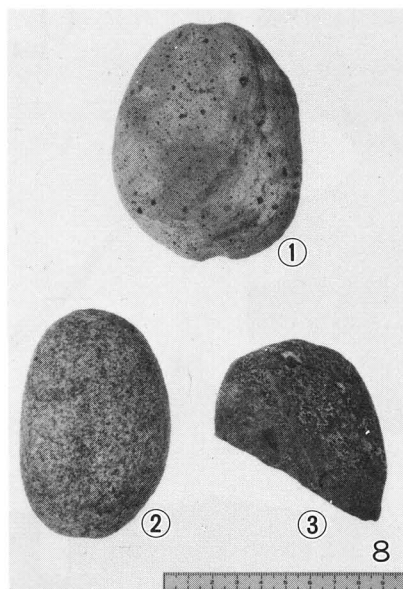
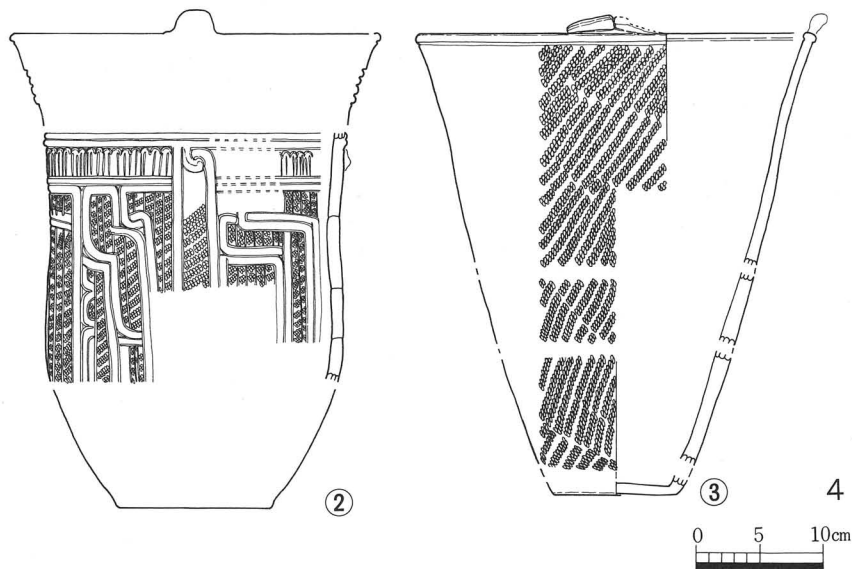
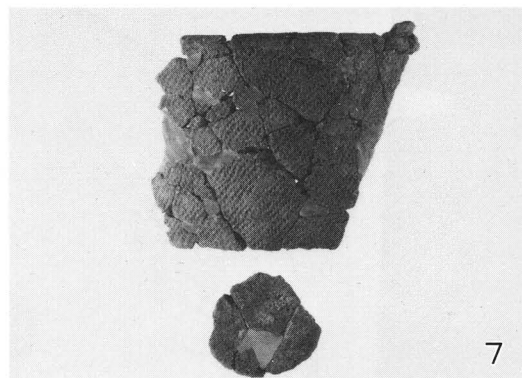
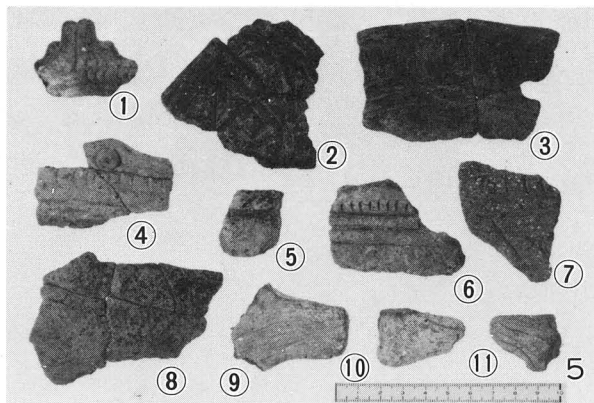
には、住居跡と有機的なつながりを思わせる穴(穴10・34)がある。特に、第34号穴は石皿(第16図8)をふせて埋めこんでおり、その位置は意図的な配置を示し住居跡の主軸延長線上にのっている。

住居跡の覆土は、暗褐色土が大半を占め、他の住居跡に比べ含まれる遺物量は多い。その出土状況は、東壁沿にまとなり、床面から若干浮き上っている。

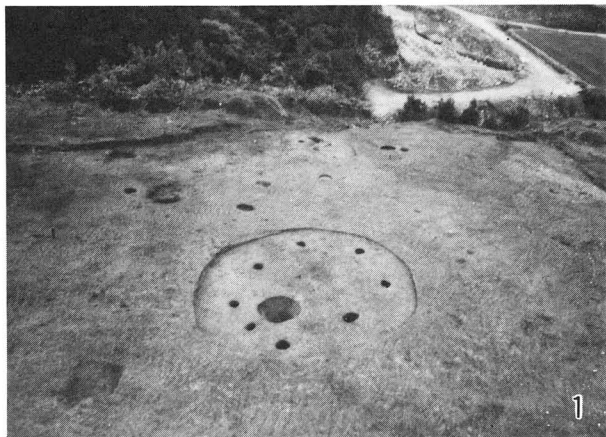
出土した遺物は、全て中期前葉の土器・石器と土製品でいずれも破片である(第10図4~8)。

土器は、大半が嚴照寺Ⅰ式の、深鉢・浅鉢形土器の破片(5の①~⑥・⑧)で、嚴照寺Ⅲ式のもの(5の⑦)は少ない。4の②は、円筒形の胴部にやや外反した口縁部が付く器形であろう。胴部には、半截竹管によって蓮弁の短い蓮華文やB字状文を施す。その地文には、4の③と同様に斜縄文(三段L・R・L)が施される。4の①は、口径50cm、器高約60cmをこえる大型の深鉢形土器で、器面全体に斜縄文(L・R)を施す。

石器としては、石錘(8の①)、凹石(8の②・③)があり、他に石皿の破片と大小の剥片がある。8の①は、扁平な川原石の両端を打ち欠き、9cm×7.5cmの石錘としている。同②は、拳大の川原石の表裏に二個の凹をもつ。また、土製品は、土偶が3点出土している(4の④・⑤、5の⑩)。いずれも腕部片で、ヘラ状工具によって細い沈線文を施す。その出土状況は、特異なものではなく、いずれも他の遺物と共に覆土内から検出された。(神保)



4. 遺物実測図(① 1/8・②・③ 1/6 ④~⑥ 1/2) 5~8. 出土遺物(5・8 1/3 6・7 1/6)



1. 住居跡全景(東より), 2. 遺物出土状況と層位

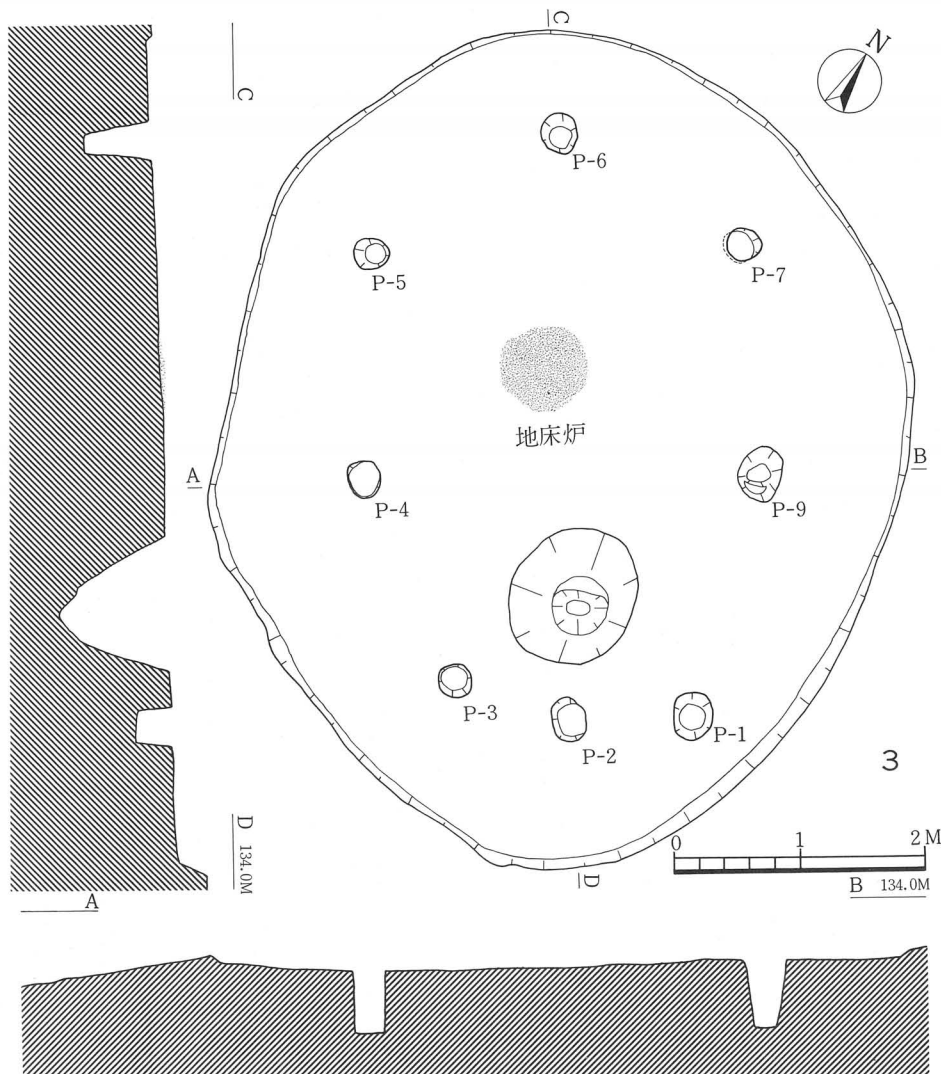
第4号住居跡(第11図, 付図1, 表1)

住居跡はX15Y58付近, 第3号住居跡の東南部分に位置する。遺存状況は, 比較的良好で, その規模は6.3m×5.5mを測る。住居跡のプランは, 長円形で主軸がN-32°-Wをとり, 第1号住居跡と南北に対峙する。

柱穴は, P₁~P₈の8本主柱Y型で, その深さが床面から20cm~60cmを測る。

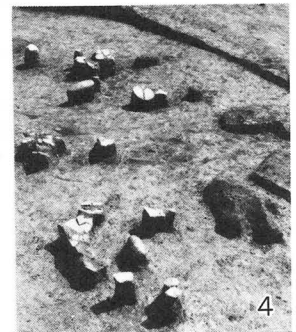
床面は, 地山面を踏み固めておりほぼ平坦であるが, しまりは周壁に向うほど弱くなっている。また, 周壁は床面に対しほぼ垂直に立ち上り, 南側では壁高差約20cm, 北側では約15cmを残す。周壁溝は, 確認できなかった。

炉は, 単設式の地床炉で70cm×65cmの長円形を呈し, 他の住居跡よりやや大型である。また, 炉の南東にある漏斗状に掘られた穴も他に比べ形態的な違いが見られる。穴は, 110cm×100cmのほぼ円形で, 深さが約90cmを測る。その掘り方は極端な漏斗状で, 底近くになると他の穴と違い段差

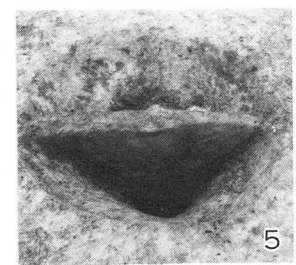


第11図 遺構と遺物

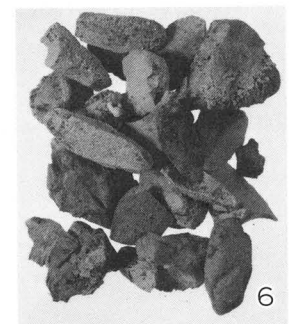
3. 遺構実測図(1/60)



4. 遺物及び炭化物出土状況



5. 漏斗状ピット発掘状況



6. 漏斗状ピット付近出土の剥片

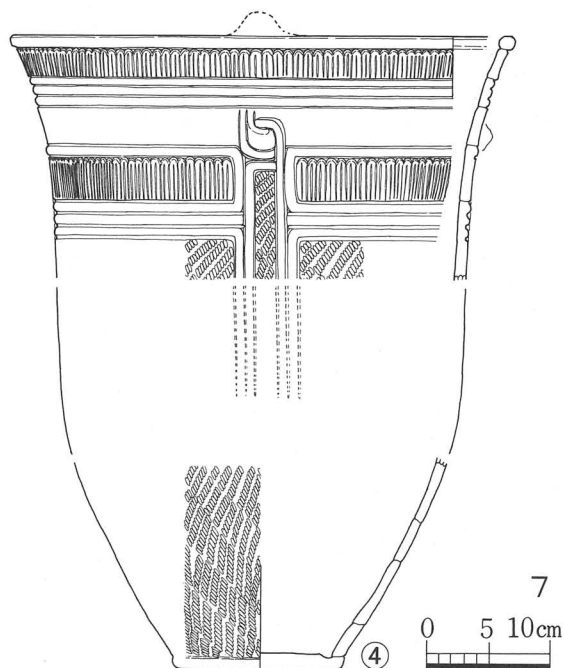
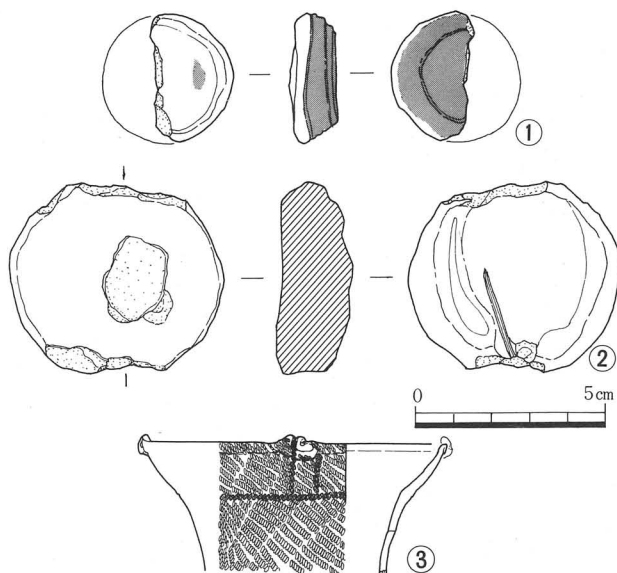
をもつ。この穴の覆土及び周囲床面上には凝灰岩質の剥片（第11図6）が多数見られ、当穴の用途を示す材料と思われるが判然としない。

住居跡の覆土は暗褐色を呈し、若干の遺物と共に炭・焼土粒、炭化材（20cm×40cmの板材？）が多量に含まれており、住居跡が火災を受けた可能性をもつ。

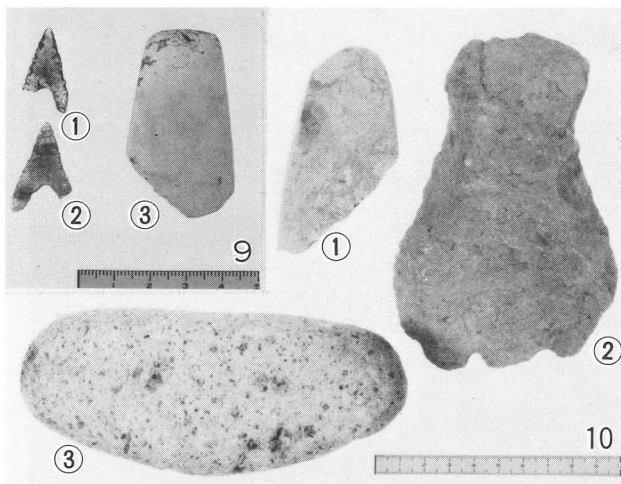
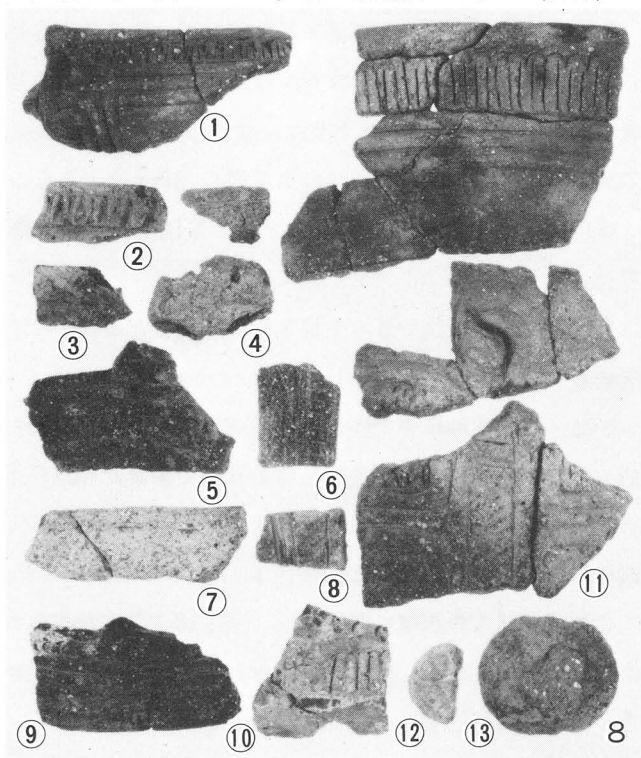
遺物は、中期前葉の土器・石器・土製品の破片がある。

土器は、厳照寺Ⅰ式が多く、これに同Ⅲ式（8の④・⑥・⑧）が少量混入している。7の③・④は、円筒形の胴部にゆるやかに外反する口縁部が付く深鉢形土器で、③は8の③と同様に口唇部外面に粘土帯を貼り付けて隆帯としている。頸部及び口辺部には、縄文原体（L・R）を押圧し、他は斜縄文を施す。④は、半截竹管で蓮弁の短い蓮華文を施す。8の①・②・⑦・⑨は浅鉢形土器で前述の深鉢形土器と同じ厳照寺Ⅰ式に属する。形態的には、口縁部がくの字状に内屈するもの⑨、口縁部がゆるく内湾し立ち上る①に二分される。8の④の有孔鏢付土器片、同⑥の綾杉文をもつ深鉢形土器片は、いずれも厳照寺Ⅲ式の土器であろう。

石器は、無茎石鏃（9の①・②）、打製石斧（10の②）、擦り切り磨製石斧（10の①）、凹石（10の③）などが少量と他に若干の剥片がある。また、土製品には、土偶の胴部片（7の①）と丹塗りの滑車形耳飾片（7の②）がある。全て、覆土中の出土であり、各1点を数える。（神保）



7. 遺物実測図（①・② ½，③・④ ¼）



8～10. 出土遺物（8・10 ¼，9 ½）



第5号住居跡（第12図，付図1，表1）

住居跡はX28Y31付近，台地中央部にある。遺存状態は悪く，北西側が切土のため消失する。南東側の周壁残存部よりその規模・平面形を推測すれば，6.9m×4mの長円形プランをもつと思われる。住居跡の主軸は，N-71°-Wで，第3号住居跡と同一軸方位をとる。

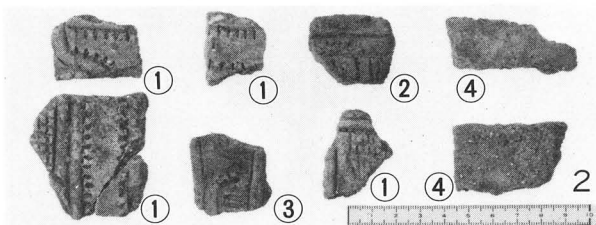
柱穴は，遺存状況が悪く判然としないが，P₁~P₉と思われ，9本主柱XY型となろう。

炉は，住居跡中央部やや東側に位置し，単設式地床炉で，44cm×18cmと小型である。炉の北側には，皿状の穴が位置する。その用途は不明である。

床面は，やや西へ傾斜し，しまりが弱く，それに直交して立ち上る周壁沿には周壁溝がない。また，他の住居跡で普遍的に見られた漏斗状の穴は，西壁沿に位置したと思われたが，風倒木痕のため検出できなかった。

住居跡の覆土は，暗茶褐色を呈し切土のため，わずか10cm程度を残す。遺物の出土は散発的で，土器片が16点にすぎない。出土した土器は，中期前葉のもの（第12図2）で，同一個体片13点を含む。斜状に施す半截竹管文にそって，刻目・格子目文を施す①や，B字状文を施す③の深鉢形土器の胴部片がある。いずれも厳照寺Ⅲ式の土器である。

④は，同時期の浅鉢形土器胴部片であろう。（神保）



第12図 遺構と遺物

1. 住居跡全景（西より）
2. 出土遺物（1/3）



第6号住居跡（第13・14図，付図1，表1）

住居跡は，発掘区の南西端X20Y28付近，第7号住居跡の北側約5mに位置する。プランは，遺存状態が良く，形状は6.9m×5.5mの長円形で全体に壁が残る。壁は，南側で30cmを測り，北側に行くにつれて浅く，10cmほどとなる。

住居跡の主軸は，N-11°-Eで第7号住居跡と同一軸方位をもつ。

主柱穴は，P₁~P₈で8本主柱Y型の配列をとる。柱穴は，床面から30cm~80cm掘り込む。

炉は，単設式地床炉で住居跡のやや南側に寄る。焼土は，固くしまったブロック状を呈し厚さ8cmで床面から盛り上った状態で検出された。また，住居跡の主軸方向北側に，漏斗状の穴を設ける。穴は，直径1.1m，深さ70cmを測る。

この漏斗状穴の西側に直径30cm，深さ10cmの穴がみられ，中には，土器が敷れ，焼土が検出された。炉とは，考えがたく，特別な用途をもつ施設と思われる。

第13図 遺構

住居跡全景（北より）

遺物は、覆土内に散在していたが、総量は少ない。

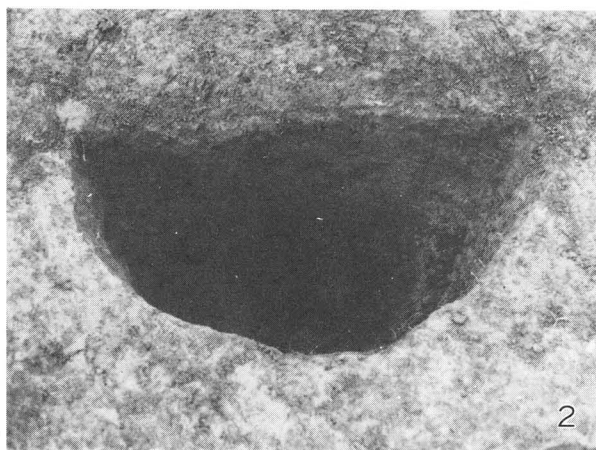
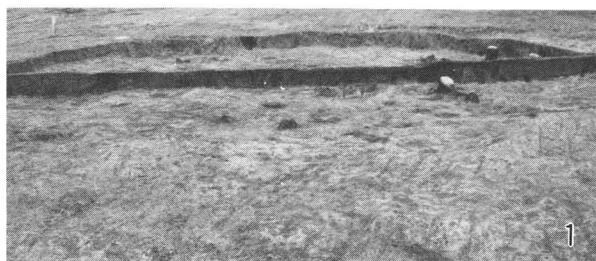
土器は、縄文時代中期前葉に位置づけられる厳照寺Ⅰ式（第14図4～6）で、器形は、深鉢（①～⑧）と浅鉢（4・5の9・6）がある。深鉢は、円筒状を呈し口縁部がやや外反する①～④や、キャリパー状となる⑤、底部からゆるく外反し口縁となる⑦がある。

①～④は、蓮華文様が半截竹管で施される。①・③は、口唇部が肥厚するが、②・④はしない。蓮華文は、概して縦長に描かれる。⑤は、爪形文と沈線により文様を描く。⑥・⑧は、B字状文・格子目文を描く、胴部・底部（⑧）の破片である。⑦は、口唇部が外面に折り返され、粘土の接合痕を残し、器面には縄文が施される。

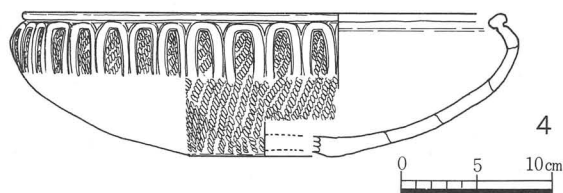
4は、浅鉢で底部からゆるく立ち上り口縁部が大きく内曲し、口縁となる。また、口唇部は肥厚する。外面には、縄文を地文とした大形の蓮華文様が施される。

⑨も同様の器形で、内面に黒色の漆が塗られる。底面は、赤く焼け、二次的な火を受けたと思われる。

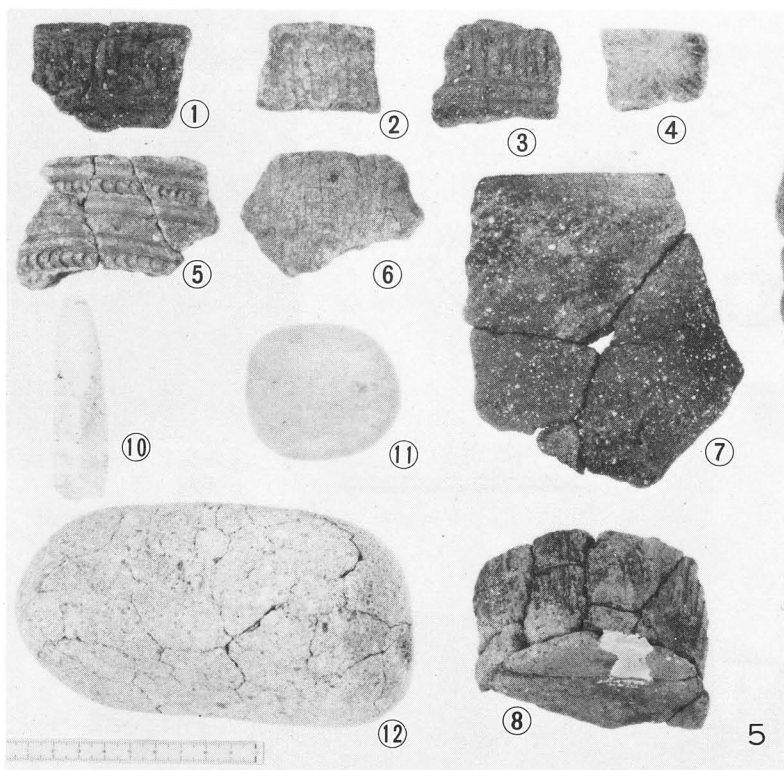
これらの土器は、口唇部を肥厚させる場合、粘土を貼り付け半截竹管をあてる厳照寺Ⅱ式以後の施法がみられない。また、口唇部に粘土を貼り付けないものも多く、より同Ⅰ式に近い。石器には、擦り切り痕を上下に残す細身の石斧⑩、河原石の一角を利用する擦り石⑫がある。（酒井）



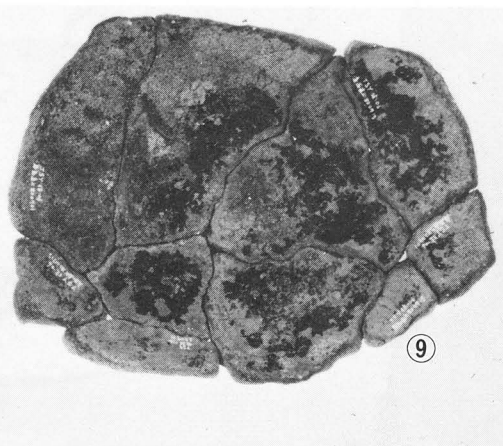
1. 遺物出土状況と層位 2. 漏斗状ピット発掘状況



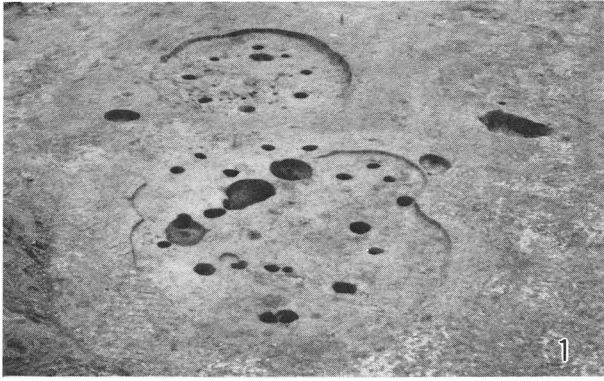
4. 土器実測図（ $\frac{1}{5}$ ）



第14図 遺構と遺物



5・6. 出土遺物（5 $\frac{1}{3}$, 6 $\frac{1}{6}$ ）

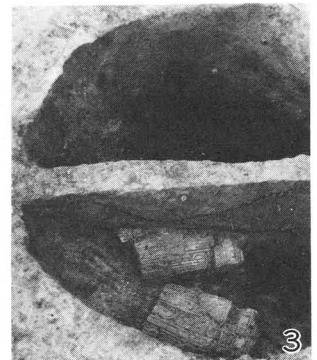
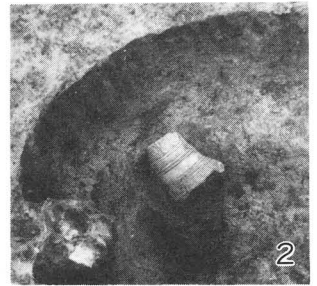
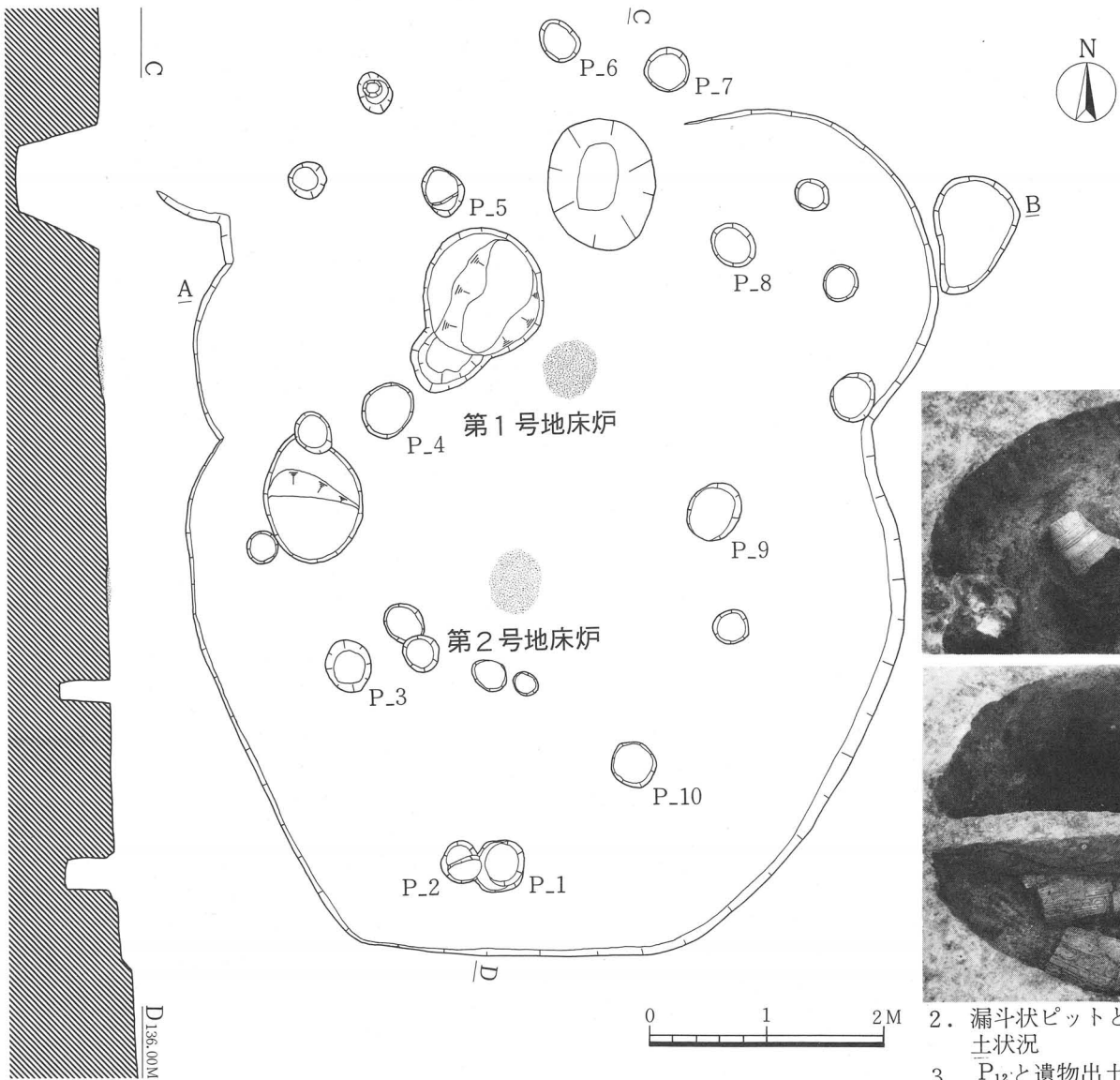


1. 住居跡全景 (南より)

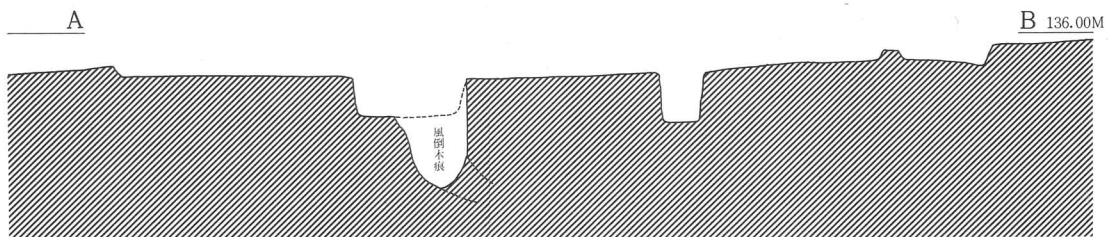
第7号住居跡 (第15図, 付図1, 表1)

住居跡はX21Y23付近, 第6号住居跡に隣接する。調査当初, その覆土上面の色調には二棟の住居が重複したような違いが認められたが, 結局, P₁~P₁₀の支柱穴を配する10本支柱X型の住居跡を確認した。他の12個を数える穴は, 住居跡の間仕切り及び上屋構造と関係したものと考えられる。

当住居跡のプランは, 8.6m×6.0mの長円形で, その主軸方位がN-10°-Eをとり, 第6号住居跡とほぼ同値の方位をとる。



2. 漏斗状ピットと遺物出土状況
3. P₁₂と遺物出土状況



第15図 遺構と遺物

4. 遺構実測図 (1/60)

P₁~P₁₀の柱穴は、床面から30cm~60cm掘り下げられ、P₁には、P₂が切り合って不明瞭なX型配置とる。

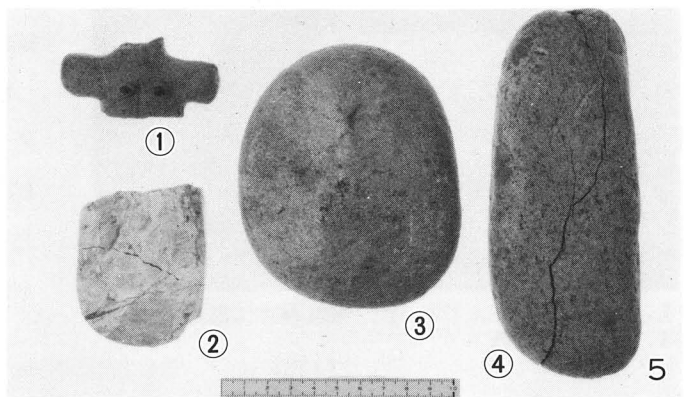
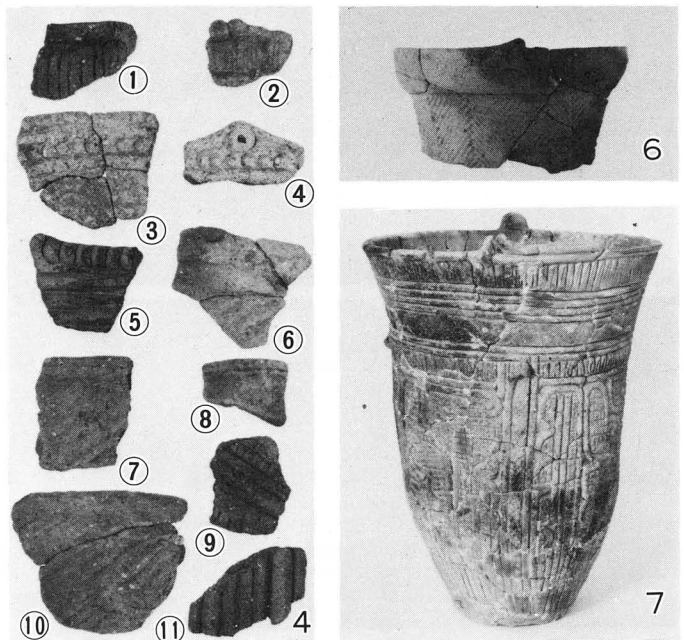
炉は複設式の炉で、2個の地床炉がその間約1.5mを隔て南北に位置する。焼土の厚さは約2cm程度で、固く焼けている。また、他の施設としては、第1地床炉の北側には、1.0m×0.9mのほぼ円形で漏斗状に掘られた穴がある。穴は、深さ約60cmを測り、住居跡の主軸上にのる。さらに、その南西側では、1.0m×1.1mで深さ約30cmの浅く皿状に掘られた穴があり、両者の覆土内から第15図7の深鉢形土器が出土した(第15図2・3)。出土層位が一致することから二つの穴に同時に廃棄されたものと思われる。

出土遺物は、中期前葉の土器・石器・土製品の破片(第15図6~8)であり、暗褐色土の覆土中から少量出土した。

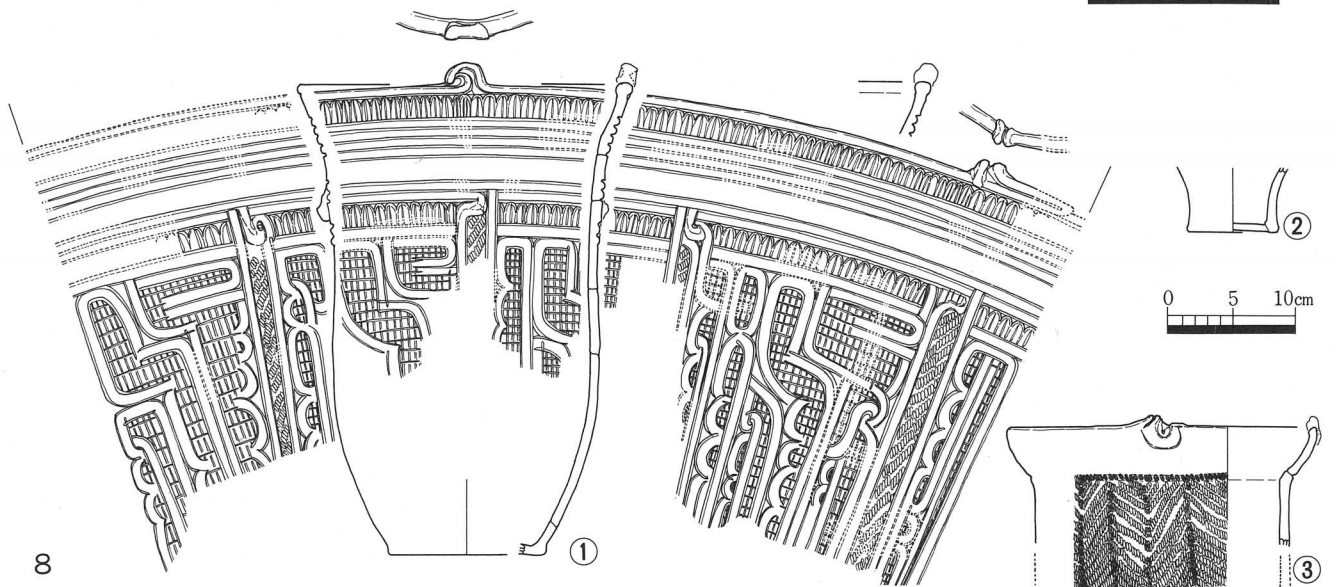
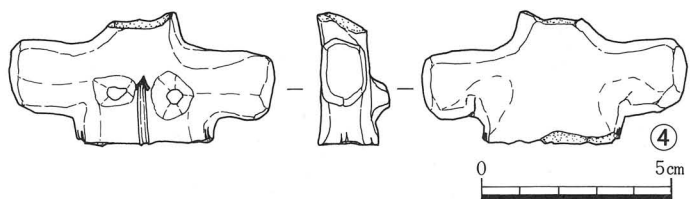
土器は、巖照寺I式(第15図4の②~⑧・⑩、6~8)が主体を占め、同III式(第15図4の①・⑨・⑪)が少量含まれる。8の①は、口辺部に二個の突起を施し、胴部文様は一周四単位の文様構成をもち、半截竹管で施された蓮華文は、蓮弁が短い。同②は、①の器形よりやや頸部の屈曲度を増す深鉢形土器で、頸部外面へ押圧縄文を、胴部には、縦位の羽状縄文を施す。

石器は、磨製石斧(5の②)、凹石(同③・⑤)が出土し、他に石皿や少量の剥片がある。

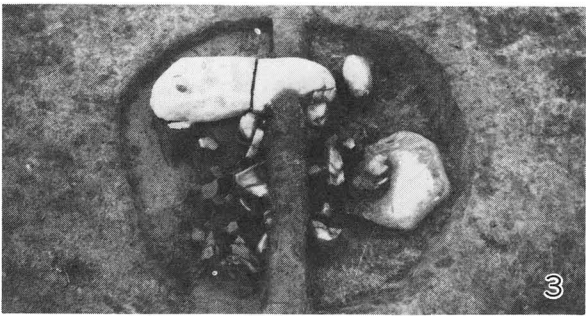
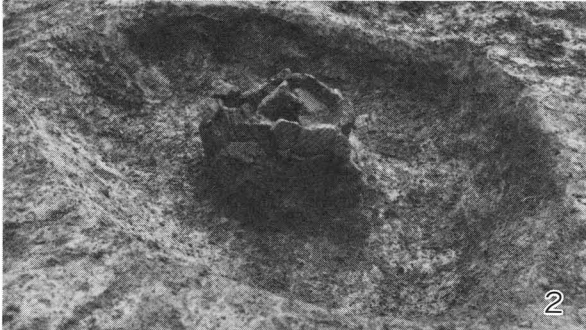
土製品としては、土偶胴部片(8の①)が覆土内から出土した。(神保)



4~7. 出土遺物(4・5 1/3, 6・7 1/6)



8. 遺物実測図(①~③ 1/6, ④ 1/2)



1. 第15号穴 (北より) 2. 第21号穴 (北より)
3. 第23号穴 (西より)

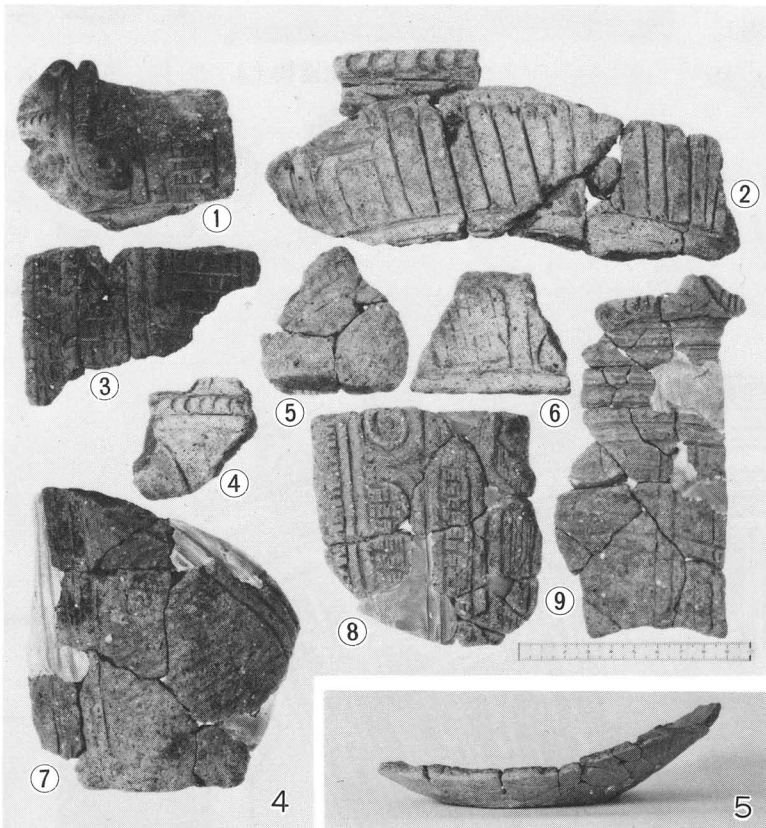
穴 (第16図, 付図1, 表1)

検出した穴は、総数17個である。穴は、住居跡周辺に集まるものと、台地中央部に集まるものに区分される。また、形態的には口径が小さい割に深く掘られる穴 (02・18・19・25・31・33) と口径が大きい割に浅く掘られる穴 (穴03・10・15・21・23・26・27・28・32・34・35) に分れる。これら穴の配置は、特別な意図がないようであるが、前者は、割合住居跡の近辺に掘られている。

各々穴の性格は、おおむね 貯蔵穴・墓穴等に区分されよう。しかし、ここでは早断をさけ主な穴とその出土遺物について概観しておく。

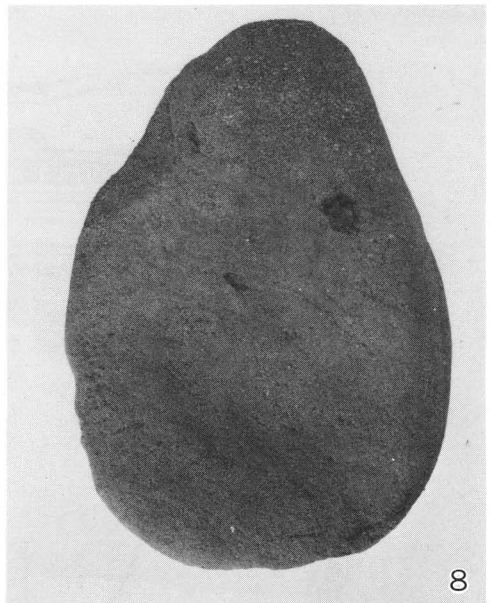
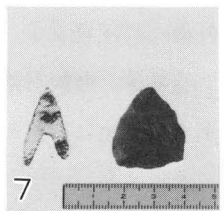
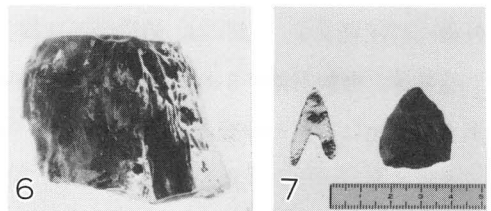
第10号穴 X10Y61付近, 第3号住居跡へ隣接する。平面形は75cm×70cmの円形で、深さ18cmを測る。穴は 袋状に掘られ、出土遺物はないが、その位置関係から第3号住居跡に関係した貯蔵用の穴と思われる。

第15号穴 (第16図1・5・9の⑥) X28Y47付近, 台地中央部に位置する。平面形は70cm×60cmの長円形で、深さ37cmを測る。覆土中から深鉢・浅鉢形土器の大型片が出土した。5は、大型の浅鉢形土器で、胴部に斜縄文 (R・L) を施す。9の⑥の深鉢形土器は、口唇部内面を肥厚させ、



第16図 遺構と遺物

4~8. 出土遺物 (4・6 $\frac{1}{3}$, 7 $\frac{1}{2}$, 5・8 $\frac{1}{6}$) 4の①・⑧第23号穴, ②第29号穴, ③第27号穴, ④第20号穴, ⑤・⑦第31号穴, ⑥第19号穴, ⑨第13号穴, 5 第15号穴, 6.第20号穴, 7.の①第20号穴, ②第22号穴, 8.第34号穴



頸部の屈曲度も弱く、当遺跡の嚴照寺Ⅰ式の器形的特徴をよく示している。

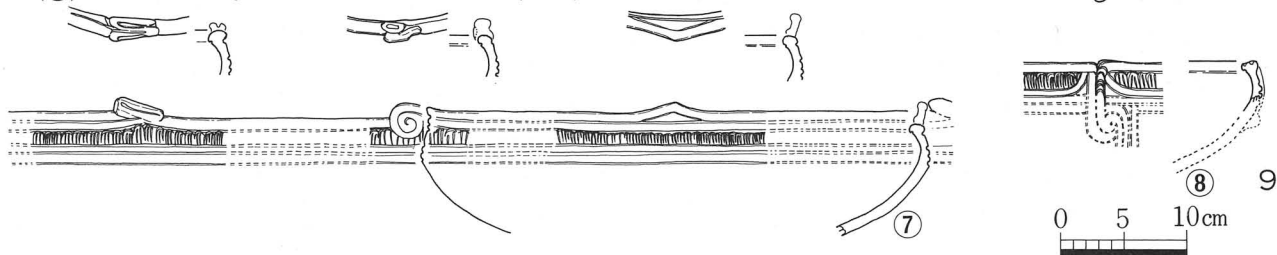
第20号穴 (第16図9の④, 6・7の①) X29Y41付近, 台地中央部にある。平面形は40cm×32cmの円形で, 深さ約33cmを測る。筒状に掘られ, 覆土中から黒曜石製の無茎石鏃(7の①), 深鉢形土器(9の④)と玉髓の石核(6)が出土した。9の④は, 蓮弁の長い蓮華文を施すもので, 口唇部内面を肥厚させ, その上半截竹管文を横走させており, 嚴照寺Ⅲ式の土器である。

第21号穴 (第16図2, 9の①) X33Y40付近, 台地中央部に位置する。平面形は66cm×55cmの長円形で, 深さ約14cmを測る。口径の割りに深さは浅い穴で, その中央部底近くから遺物が出土した。9の①は, 嚴照寺Ⅲ式の深鉢形土器で, 円筒形の胴部にやや外反した口縁部が付く。肥厚した口唇部内面に半截竹管文が横走り, 器面には, 蓮弁の短い蓮華文が施文されている。

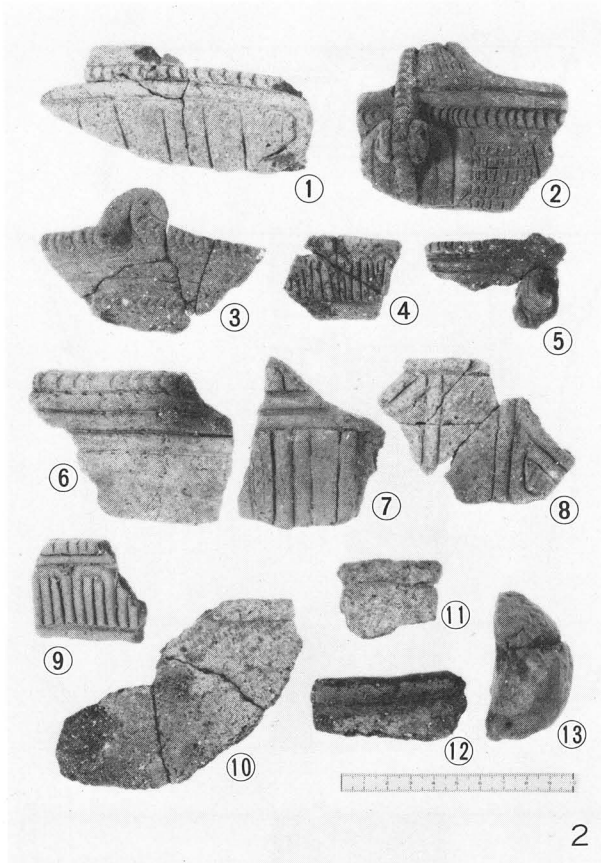
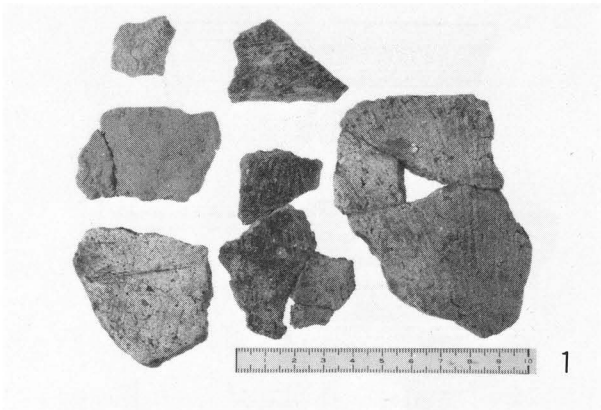
第23号穴 (第16図3, 4の①・⑧, 9の⑤・⑦・⑧) X32Y33付近, 第5号住居跡に近接する。平面形は1.37m×1.35mの円形で, 深さ約36cmを測る。穴の底から約10cm程度浮いた状態で, 多量の遺物や大型の礫が数点出土した。遺物は大半が嚴照寺Ⅰ式に属するもので, 同Ⅲ式のもの(9の⑧)が少量混ざる。9の⑦は, 口縁に3個もしくは6個の突起が付く浅鉢形土器で, 外反した胴部に内湾ぎみに立ち上る口縁部が付く器形である。口唇部内面は粘土帯を貼り付け, その上半截竹管文を横走させる。⑧は, ⑨と同器形のもので, 蓮弁の短い蓮華文等を施す点も類似する。いずれも嚴照寺Ⅰ式に比定される。なお, ⑧と同一個体の口縁部片が, 第4号住居跡覆土から出土しており当遺跡の遺物廃棄におけるかたづけの一端を示す。

第34号穴 (第16図8の①) X12Y59付近, 第3号住居跡に隣接する。平面形は67cm×50cmの長円形で, 深さ10cmを測る。表面の一部に炭化物が付着した砂岩質の石皿(①)が伏せられる。

(神保)



穴出土遺物実測図 (1/3) ①第21号穴, ②第13号穴, ③第29号穴, ④第20号穴 ⑤・⑦・⑧第23号穴, ⑥第15号穴



(2) 遺構外の遺物

遺構外からは縄文時代早期と中期前葉の土器と土製品・石器が出土している。

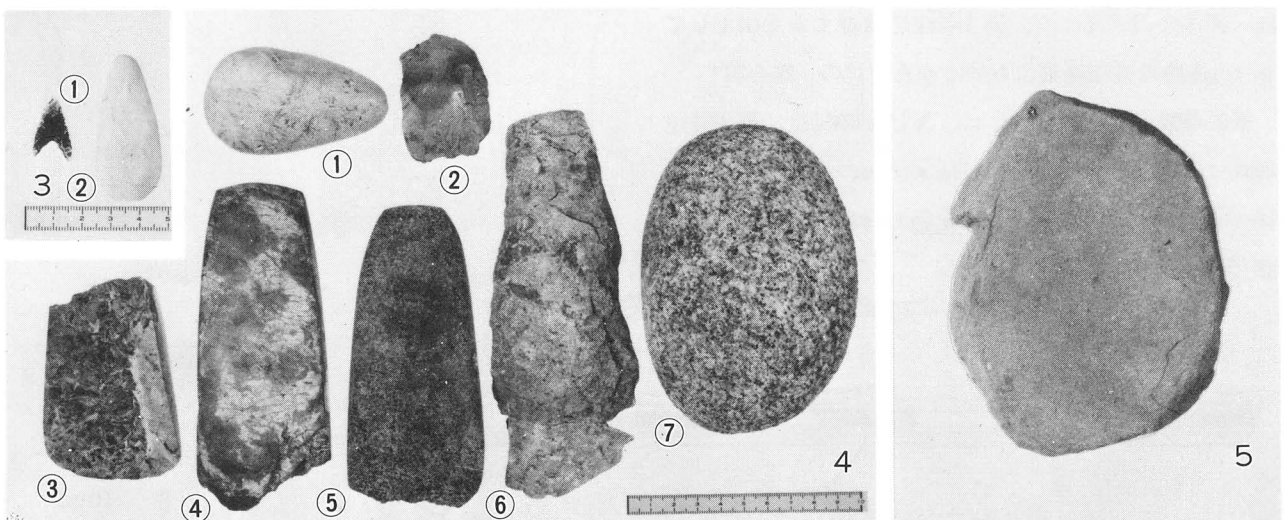
縄文時代早期の土器には回転押型文土器と表面に貝殻腹縁による条痕文が施された土器がある(第17図1)。前者は無文帯部を伴う山形文で、胎土に繊維は含まれない。押型文土器の中でも古い段階のものである。後者は植物繊維が含まれている。

縄文時代中期前葉の土器は厳照寺I式(第17図2の①、⑥・⑦・⑩~⑫)と厳照寺III式(同2の②~⑤・⑧・⑨)に分けられる。前者は深鉢形土器で、竹管を鈍角におしあてた爪形文と胴部にB字状文が施されている。口唇部内面に肥厚した稜が形成されており、厳照寺II式に近い要素もみられる。後者は深鉢形土器で、鋭角におしあてた爪形文や蓮弁の長い蓮華文が施される。肥厚した口唇部内面上をナデたり、半截竹管文を横走りさせたりしている。

土製品として土偶の胴部片がある(第17図2の⑬)。

石器には石鏃・打製石斧・磨製石斧・擦石・石皿がある。石鏃(第17図4の①)は黒曜石の無茎石鏃である。打製石斧(同4の⑦)は安山岩製で短冊形を呈する。磨製石斧(同4の②・③~⑥)はすべて蛇紋岩製で①のような小型品もある。④の側縁には擦り切り手法の痕跡がある。擦石(同4の⑦)は楕円形の河原石が利用され、両側辺に削痕がある。また、蛇紋岩製円礫の表面に磨きが施される石器がある(同4の①・②)。吉峰遺跡にも類品がみられる〔柳井・神保 1975〕。

(奥村)



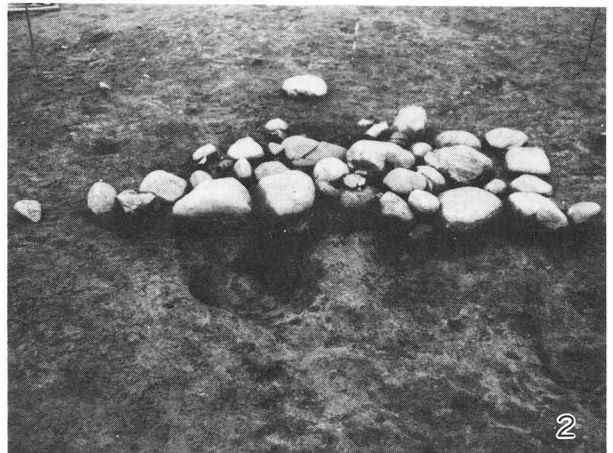
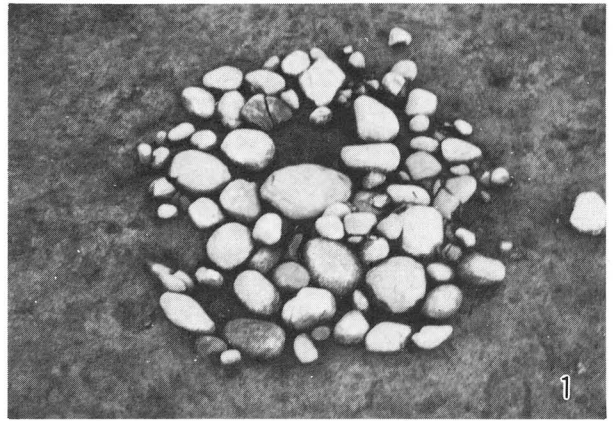
第17図 遺構外の遺物 (1・3 1/2, 2・4 1/3, 5 1/6)

5 その他の遺構

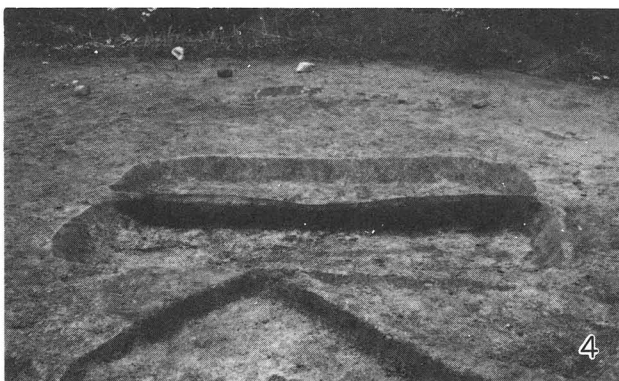
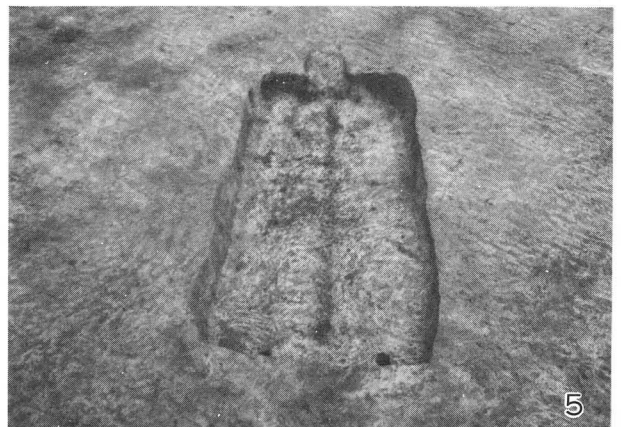
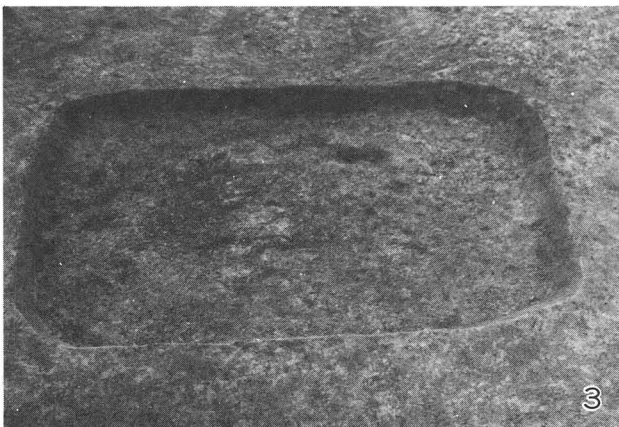
その他の遺構には、炭焼窯と思われる穴4個と集石を伴う穴1個（穴01・22）がある（第18図，表1）。

前者は形態的に、円形のもの1個（穴06）と隅円の長方形のもの3個（穴09・24・30）に区分される。共通する特徴は、側壁が赤褐色に焼けており、覆土に炭・焼土粒がレンズ状に堆積することである。特に第30号穴は（第18図5・6），長軸4.25m，短軸1.80mの比較的大きなものである。底面の一部が赤褐色に焼けており，底面に接して炭粒が約8cmの厚さで堆積している。北側内縁に径10cm，深さ約15cmの小ピットが一对あり，焚口が設けられたものと考えられる。さらに南側奥には突出した窪みがあり，煙道の痕跡と考えられる。これらは，伏焼法による炭焼窯〔岸本1976〕と考えられる。年代を示す遺物が伴出しておらず，所属時代は不明である。

後者の第22号穴は（第18図，1・2），深さが約20cmの浅い播鉢状を呈し，その内側に20～40cm大の礫がほぼ円形に集石されていた。年代を示す遺物が伴出しておらず，所属時代及び遺構の性格は不明である。（奥村）



1. 第22号穴全景（北より） 2. 集石状況と層位



第18図 その他の遺構

3・4. 第24号穴全景（西より）と層位
5・6. 第30号穴全景（北より）と層位

6. ま と め

ここでは、今回の調査で検出した、先土器・縄文時代の遺構・遺物について、現在まで判明した点とその問題点を述べまとめとする。

(1) 先土器時代

第1ユニットの石器組成は錐状石器・局部磨製石斧・分断手法による剥片・石核・剥片である。特に、分断手法を駆使して石器製作を行なっている点に特徴がある。また、石質にはメノウが多用されている。これらの様相は、富山県第Ⅱ期bのウワダイラⅠ・Ⅱ両遺跡の様相〔橋本 1976a〕に近似している。同じ様相を示す遺跡として県内には、婦中町細谷No.3 遺跡A地点がある。〔山本他 1978〕。

第2～4ユニットについてはその存在が確認されたにとどまる。次年度の調査で全貌が解明される予定であり、4ヶ所のユニットの関係や場の性格など総合的な見地から究明されよう。 (奥村)

(2) 縄文時代

厳照寺Ⅰ式土器について

当遺跡出土中期前葉の土器群は、高堀勝喜氏による新崎・上山田古式土器〔高堀 1954・70〕に比定される。近年、神保は、新崎・上山田古式に見られる。土器製作第Ⅱ・Ⅲ段階〔橋本 1968〕での違いを区分基準に、厳照寺Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器を設定した〔神保 1976〕。その後、福光町竹林Ⅰ遺跡から、厳照寺Ⅲ式の一括資料を得ている〔神保 1980〕。

当遺跡の土器群は、厳照寺Ⅰ式土器と厳照寺Ⅲ式土器に区分できる。この内、前者が出土遺物の大半を占める。当遺跡の厳照寺Ⅰ式土器は、同Ⅱ式土器の要素をもつ。厳照寺Ⅰ式土器は、城端町西山B・砺波市厳照寺・婦中町滝谷遺跡〔神保 1976・77・79〕で検出しており、全て共通した様相をもつ。当遺跡の土器群と比較すれば、以下のような差異が認められる。

厳照寺Ⅰ式土器の中で、もっとも代表的な土器の器形は、円筒形の胴部にキャリパー状の口縁部がつき、その頸部が急激に外反・屈曲するものである。当遺跡でそれに該当するもの(第11図7の③・第15図8の③)は、頸部の外反・屈曲度がややゆるく、厳照寺Ⅱ式の様相を示す。また、口唇部内面の成形においても違いを認める。本来の厳照寺Ⅰ式土器は、口唇部内面の稜を肥厚させない。当遺跡の土器には、口唇部内面に粘土を貼り付け、不完全ながらも、その上に半截竹管文を施すものがある。この手法は、厳照寺Ⅱ式の段階で完成多用され、それへ手法的に連続する。

土器製作第Ⅲ段階での違いは、もっとも多用される蓮華文・爪形文においても認める。すなわち、蓮華文には、ヘラ状工具で器面をえぐり刻んで蓮華文とするもの(第15図4の②)といった。従来のⅠ式に近い手法がある反面、半截竹管によって刻み、蓮弁の短い蓮華文を表出するもの(第15図4の③)もあり、ここでは後者が多用されている。また、同Ⅰ式におけるC字状爪形文は、器面に対し半截竹管を鈍角をあてる特徴を有するが、当遺跡では、その角度がやや強く、厳照寺Ⅱ式以降の鋭角にあて、突き刺すように押したもの(第16図9の②)の先駆的な手法をとる。

以上の特徴を要約すれば、当遺跡の土器群は、従来の厳照寺Ⅰ式土器の要素と同Ⅱ式土器の要素を合せもち、厳照寺Ⅰ式・同Ⅱ式の間接的な様相をもつ一群となる。これを一型式の土器群として認定し、厳照寺Ⅰ式と同Ⅱ式の間位置づける事も可能である。しかし、型式間移行段階に属する一群を一型式とすると幾つかの問題が生ずる。その一つは、移行期の時間幅の考え方であり、その二つは、移行期のありかたに不偏性が認められるかという点である。これが検討され、一型式として認定するに足るとなれば、土器型式の細別に新方向を加えることになる。しかし、この点については、器種構成・分布地域、さらに他地域における編年との対比など未解決な部分が多い。この問題は、今後の課題としておく。ここでは、当遺跡の土器群を、厳照寺Ⅰ式のうち、新しい要素をもつ一群として位置づけておく。この場合、地域差を有する一群であるとする可能性も残しておく必要がある。 (神保)

竪穴住居跡と集落の変遷について

当遺跡で検出した遺構は、竪穴住居跡7棟と穴が16個である。

竪穴住居跡は、数本の柱穴、単設もしくは複設式の地床炉と、1個の漏斗状ピットで構成される。県内における竪穴住居跡の分類と系譜については、その平面形と、支柱配置の型を区分基準として、すでに橋本正氏が論じている〔橋本1976〕。当遺跡の竪穴住居跡は、三つに区分される。すなわち、方形もしくは長円形のプランで、X型の支柱配置をもつもの(第3・7号住居跡)、長円形のプランで、Y型の支柱配置をもつもの(第1・2・4・6号住居跡)、長円形のプランで、XY型の支柱配置に分かれる。また、当遺跡の竪穴住居跡の配置を観察すると、住居跡の主軸方位がほぼ同一なものを認める。第1号住居跡と第4号住居跡、第3号住居跡と第5号住居跡、第6号住居跡と第7号住居跡がそれぞれ同一方位をとる。こうした現象は、相互の有機的なつながりを暗示するものと理解される。さらに、当遺跡出土の遺物には、前章で示した通り、少なくとも二型式以上の時間幅をもつ土器群がある。それらは、かたづけ行為〔橋本1971〕によって各遺構内へ廃棄されている。このことは、土器の新旧の二者が混在していたことで証明できる。

以上の点を総合すると検出した遺構は、時間差を有する小群に区分できることになる。以下、当遺跡の集落の複原とその変遷を追ってみたい。

白岩薮ノ上遺跡第Ⅰ期の集落

当遺跡へ最初に住み着いた縄文人は、前述した厳照寺Ⅰ式の土器を用いた人々であろう。まず、第2・3・7号住居跡が造られ、台地中央部を広場とする三角形の配置がもたれた。規模は小さいが、同時期の遺物が出土した城端町西山B遺跡の場合〔上野他1976〕ときわめて類似する。この期に属する穴については、第3・10・34号穴^{註③}が考えられ、それぞれ貯蔵穴または、墓穴として掘られたものであろう。

白岩薮ノ上遺跡第Ⅱ期の集落

次に住み着いたのは、おそらく厳照寺Ⅱ式土器から同Ⅲ式土器が普遍化する頃であろう。第4・6号住居跡が造られるが、その人々は調査区内に遺物を残していない。他に捨場をもとめたのだろうか。同期に造られたと思われる住居外の貯蔵穴や墓穴は、判然としない。

白岩薮ノ上遺跡第Ⅲ期の集落

当期に住み着いたのは、厳照寺Ⅲ式土器が普遍化した頃の人々であろう。第1・5号住居跡が造られ、その人々はさらに上記の人々が残した遺物を自分達のそれととりまとめ、くぼ地になった住居跡や穴の跡へかたづけている。この期に属する穴は、現時点では第23号穴が考えられ、それは貯蔵穴もしくは墓穴であった可能性をもつ。

以上、大胆な推論を加え当遺跡における集落の複原とその推移を見てみたが、これはあくまで、現段階でのみととしであり、今後、前述した土器群の細吟味と共に、さらに一考の余地を残す。

註① この器種は「折断調整石器」と仮称されている〔岡村1979〕。岡村氏によれば、剥片の側辺が折断され台形または三角形に成形された石器で、残された縁辺が刃部として利用されるという。さらに折断面や刃部に二次加工が施される場合もあるらしいが、当遺跡では認められなかった。

註② 厳照寺Ⅰ式を広義の新崎式の古手、厳照寺Ⅱ式を新崎式、厳照寺Ⅲ式をほぼ上山田古式に比定している。

註③ 平野部に突出した小さな舌状台地上で、竪穴住居跡4棟を確認。うち3棟が厳照寺Ⅰ式の土器を伴う。その型は、4本支柱方形X型? (第1号住居跡)、6本支柱長円Y型? (第3号住居跡)、7本支柱長円XY型? (第4号住居跡)と判断され、それらが台地中央部を広場として三角形の配置をとる。

Ⅲ 吉 峰 遺 跡

1. 過去の調査と経緯

吉峰遺跡は、富山県中新川郡立山町吉峰野開字吉峰に位置する、東西約130m・南北約400mの台地上にある。一帯は、その西側を北流する常願寺川によって形成された河岸段丘にあたり、標高は約230mを測る。

当遺跡の調査は、今回で第5次目を数える。遺跡発見及び調査の経緯は、過去の各次調査報告〔橋本 1970・72〕、〔小島 1974〕、〔柳井・神保 1975〕において、すでに述べられており、ここでは詳しくふれないが、民間による遺跡一帯の土取り事業が開始され、すでに12年の歳月が流れている。富山県教育委員会と立山町教育委員会では、これに対処し、過去四回に渡る調査を行なってきた。(第19～22図)。

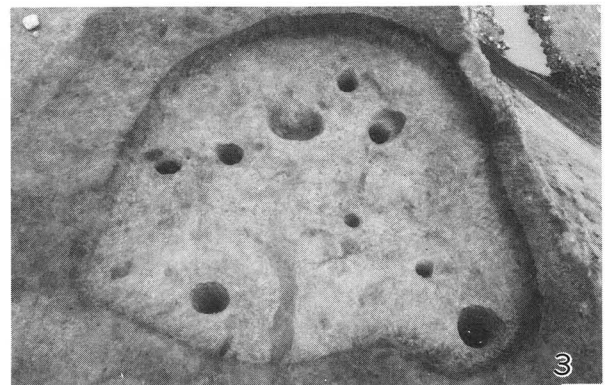
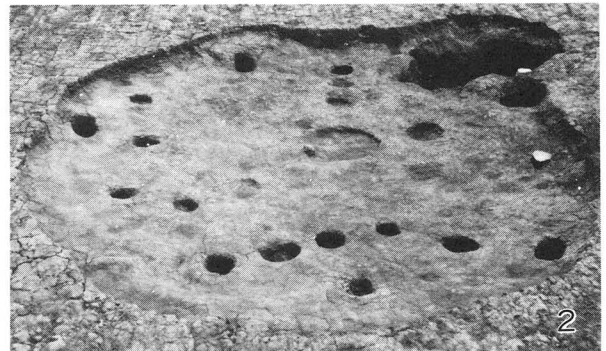


第19図 遺跡遠景 (西より)

第1・2次調査は、遺跡の範囲と内容を把握する予備調査として、昭和44年11月・昭和45年3月に実施された〔橋本 1970・72〕。調査では、住居跡等の遺構を検出し、当遺跡が先土器時代から縄文時代晩期に及ぶ集落跡であることが確認された。

第3次調査は、遺跡中央部北側を調査対象とする記録保存調査である。調査は、昭和48年8月～同年9月に行なわれ、約2,500㎡が調査された〔小島 1974〕。調査では、縄文時代前期中葉の住居跡7棟、同前期末葉の住居跡1棟と穴20個を検出し、多数の出土遺物と共に県内の縄文時代前期の研究に好資料を提示した。

第4次調査は、土取り工事の進捗に伴って、昭和49年6



第20図 第3・4次調査

1. 第4次調査発掘状況 2. 第10号住居跡(第3次調査検出)
3. 第34号住居跡(第4次調査検出)

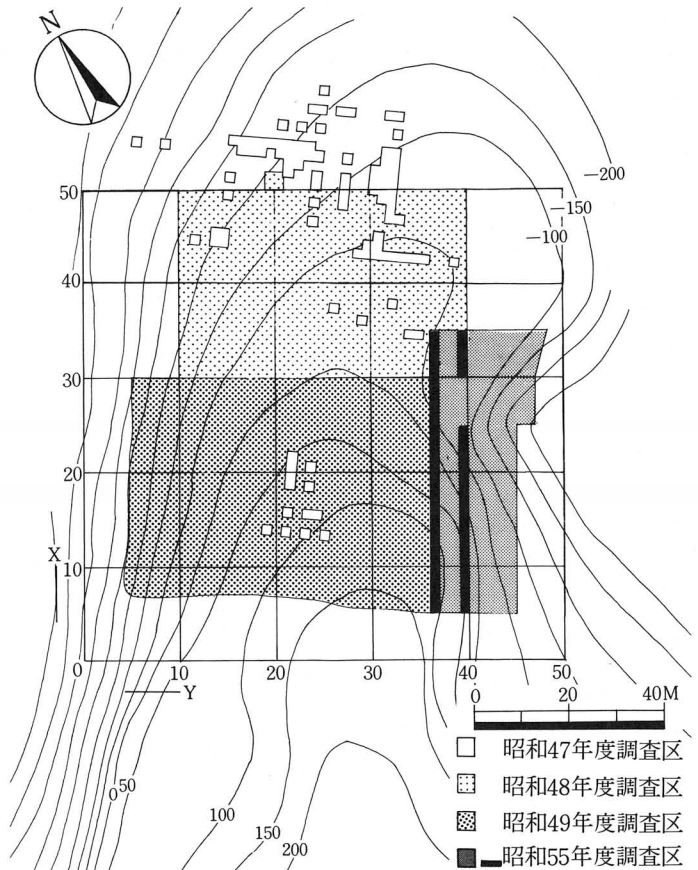
月～同年11月に渡って実施された。調査対象地は、第3次調査区の南側で、総発掘面積は約3,200㎡である〔柳井・神保 1975〕。調査では、多数の出土遺物と共に、第3次調査では検出されなかった縄文時代前期後葉の住居跡5棟と他に同前期中葉の住居跡1棟、穴81個が検出された。

2. 調査の経過と遺構

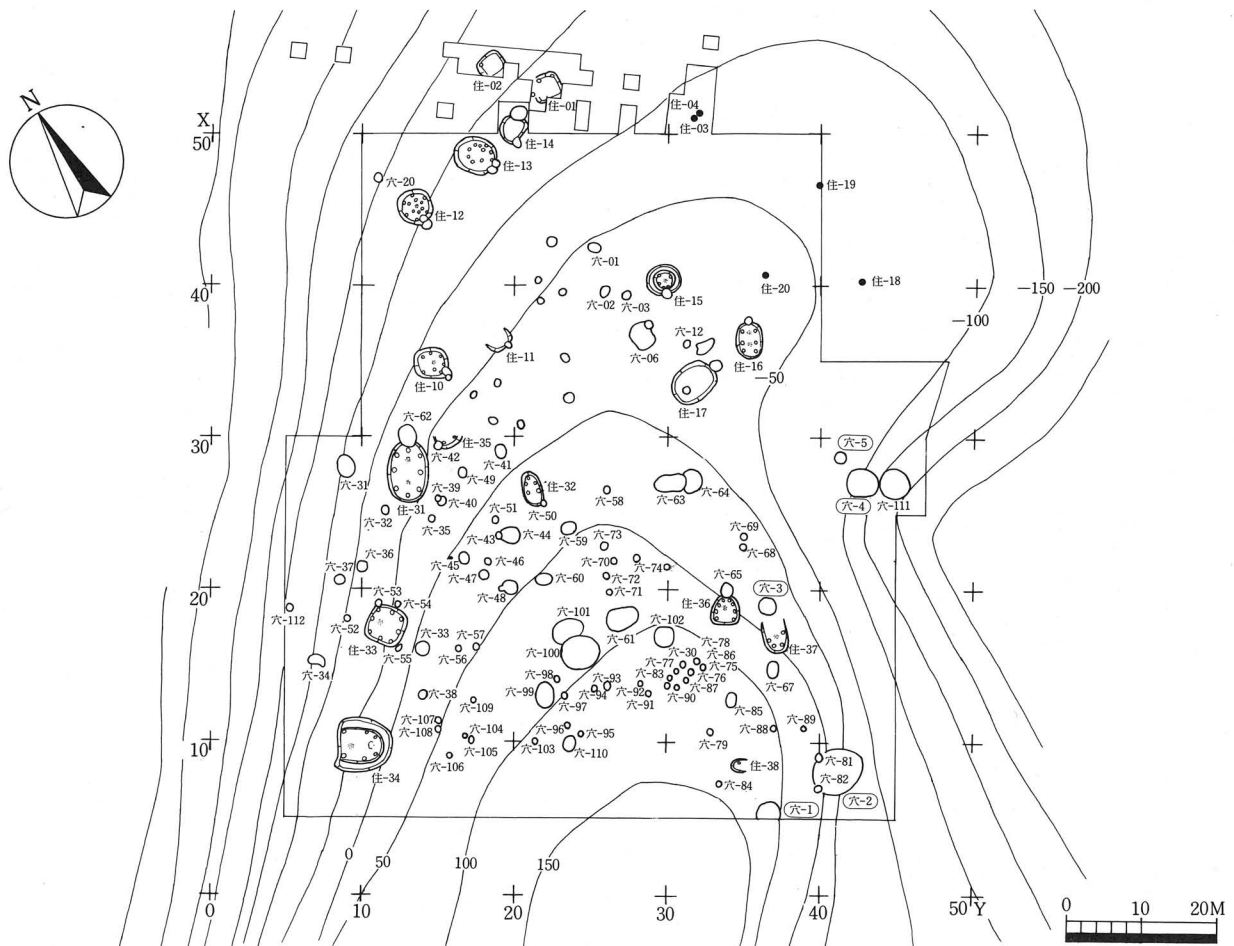
今回の調査は、第4次調査以降一時中止されていた土取り事業が、再開されることになったため、実施した。調査対象地は、第4次調査区の東側約1,500㎡で、吉峰部落とは比高差約10mをもって東接する。一帯は、遺跡の東側縁辺部に当り、台地の斜面部と鞍部である。その現況は荒地・畑地で、周辺が土取りされ島状になっている(第22図)。

調査は、第4次調査のグリッドを利用し、1区画を10m×10mの大区画として作業を進めた。総発掘面積は約1,100㎡である。

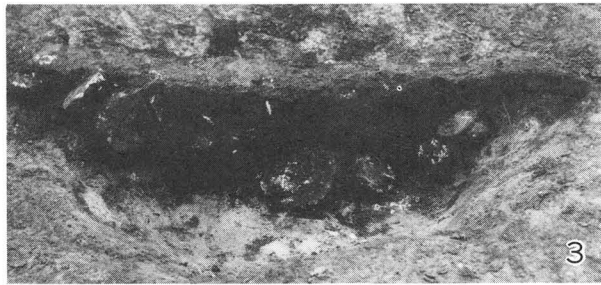
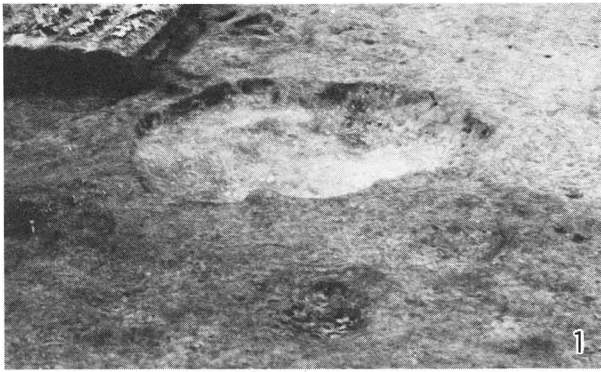
調査区南側は、東方向に傾斜する地形で、土層は



第21図 地形及び区割図 (1/1,600)



第22図 遺構概略配置図 (1/1,000) ○は第5次調査検出。



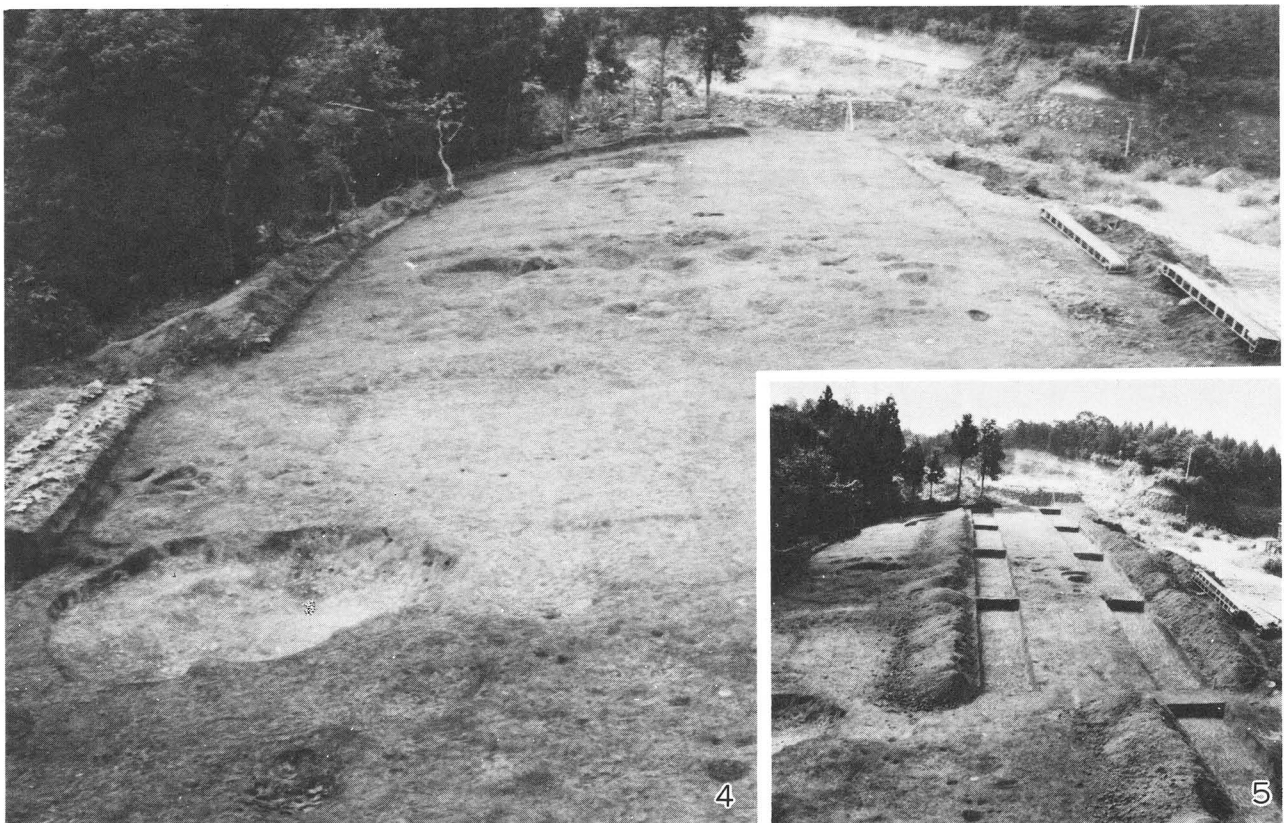
1. 第4・5号穴全景(北より) 2・3. 同層位

耕作・樹木の根や抜根のため著しい攪乱を受る。各区の層序は、1層(10cm~15cm)は耕作土。2層(15cm~20cm)は暗褐色土で、斜面上部と下部では変動的な厚さを示し、以下の地山層(黄褐色粘質土)となる。遺物包含層は、2層で、若干の遺物が出土する。一方、調査区北側は、鞍部で、調査の進行と共に暗褐色土の堆積する谷地形が表われた。各区の層序は、1層(10cm~15cm)は耕作土、2層(10cm~20cm)は黒褐色土で、耕作による著しい削平の痕跡が認められる。3層(30cm~40cm)は暗褐色土である。その下層部には若干の礫を含み、以下の地山層へ移行した。この一帯の遺物包含層は、2・3層で、調査区南側の各区に比べ遺存状況が良く、出土遺物量は多い。

検出した遺構としては、両調査区を通じて明確なものはなく、覆土内に円礫を含む穴1個(穴05)と、いわゆる風倒木根と思われる穴4個(穴01~04)を調査したにすぎない(第32図・第23図上)。

なお、調査期間後半、過去に当調査地区付近で先土器時代の石器が表採されたことから、幅2mのトレンチ二本を設定し、調査したが、なんら遺物は出土しなかった。(第21図、第23図下)。

(神保)



第23図 発掘区全景と調査状況

4. 発掘区全景(北より)
5. 先土器時代の調査

3. 出土遺物

出土遺物には、縄文時代早期～晩期の土器・石器がある。量的には、石器が多く、いずれも遺物包含層から出土した。

(1) 土器

縄文時代前期の土器を主体に早期～晩期のものがある。

縄文時代早期の土器 (第12図1)

回転押形文土器が一点出土している。文様は、細かい楕円文様で胎土に、少量の繊維を含む。

縄文時代前期前葉の土器 (第12図2)

器形は、尖底・平底の両者がみられ、胎土に多量の植物繊維を含む。文様は、押圧縄文・爪形文などを口縁部に施し、胴下半部は、羽状縄文・貝殻腹縁による条痕となる。④は、底部にヘラ状工具による刻みが施される。これらの土器群は、前期初頭極楽寺式〔小島 1965〕に比定される土器とそれに後続する土器を含む。

縄文時代前期中葉の土器 (第12図3の①～⑨)

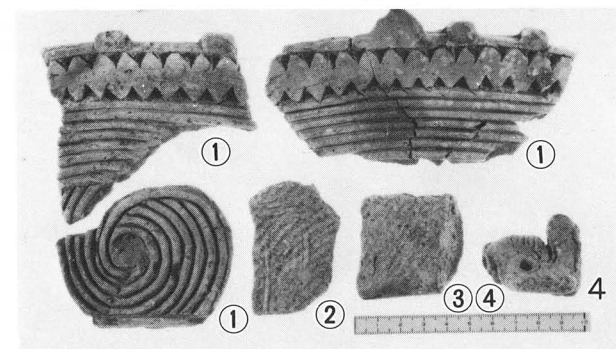
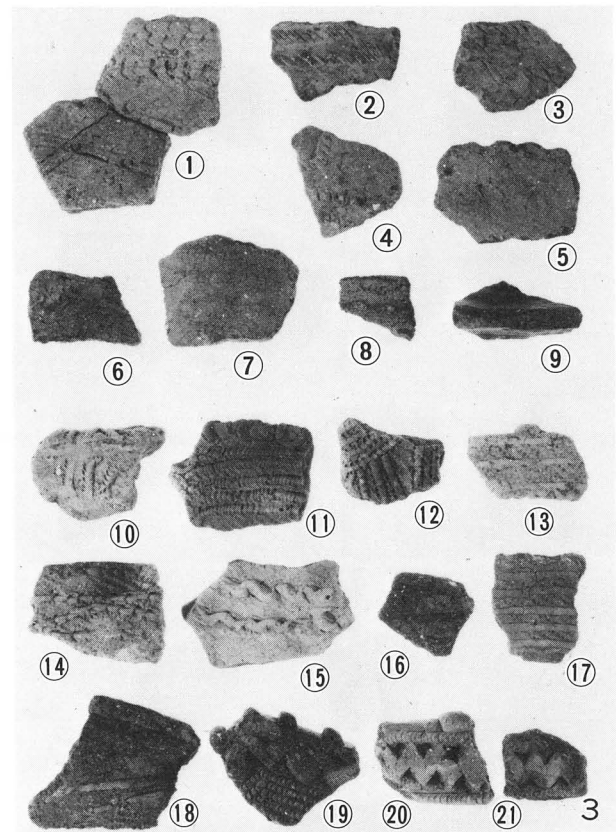
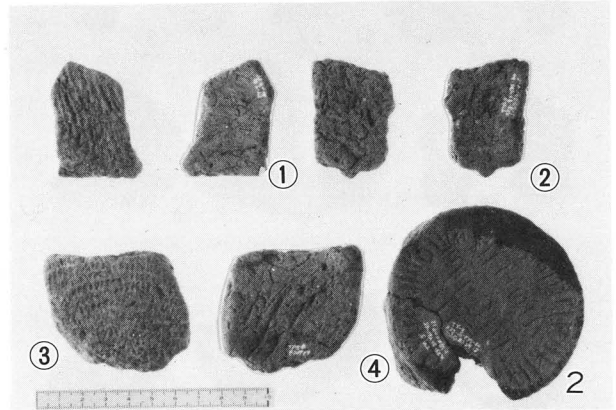
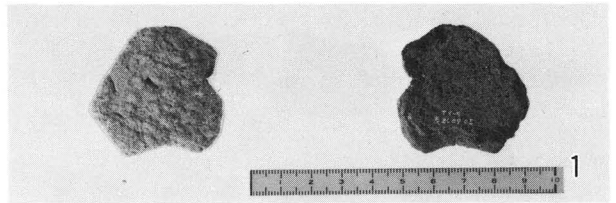
朝日C式・福浦下層式の二型式が設定されているが、内容は不明確である。①は、半截竹管により格子文様を描き爪形文・円形の押圧などを施すもので諸磯a式に類する。②～⑦は、太い貼り付け粘土紐上をヘラ状の工具で刻み、胴下半部は羽状縄文となる。この土器群は、諸磯b式的な様相をもつ。また、⑥は、荒い爪形文様を土器上半部に数段施す、北白川下層式系の土器である。

縄文時代前期後葉の土器 (第12図3の⑩～⑳・4)

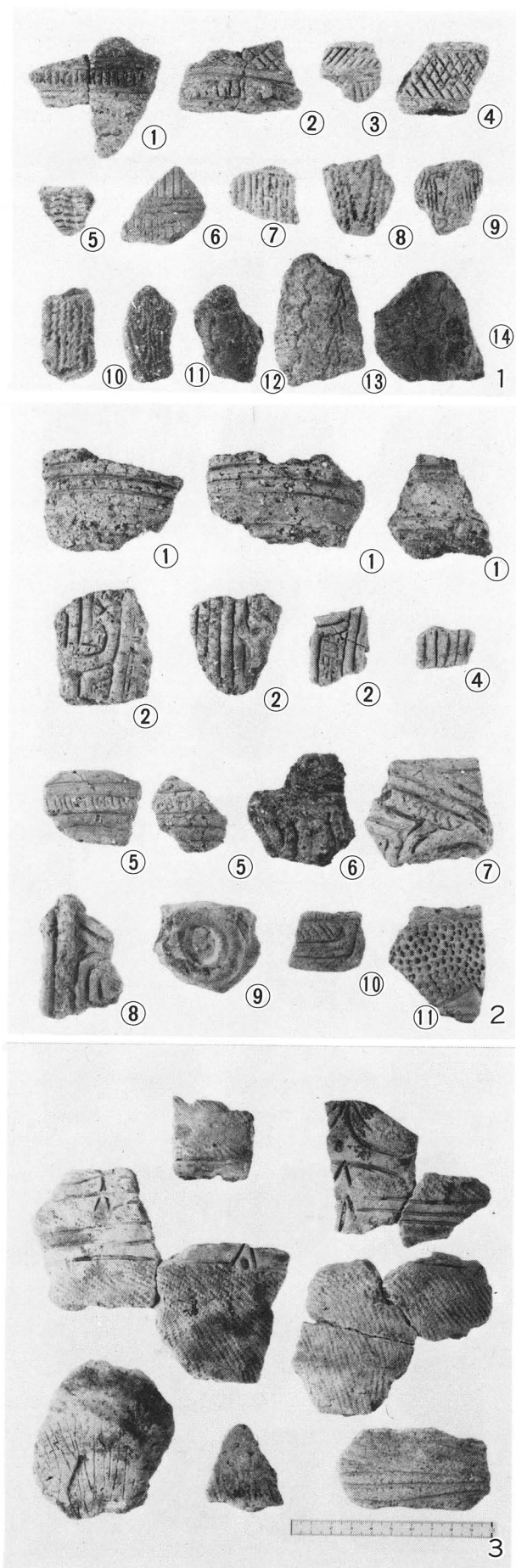
前期後葉には、蛭ヶ森式〔富大考研 1959〕・福浦上層式〔高堀 1965〕・朝日下層式が設定されている。

⑦は、ミミズ腫れ状の微隆起線が数条施される。蛭ヶ森式に比定される。

福浦上層式土器は、羽状縄文を地文とした浮隆爪形文・細い粘土紐の貼り付けを施す⑩～⑱がある。また、⑲～㉑は、三角形印刻鋸歯状文を施し、上下に浮隆爪形文を配している。4は、朝日下層式に属する土器で、浮隆爪形文を施さない三角印刻鋸歯状文、細目の粘土紐の貼り付けで文様を描く。①は同一個体で細い半截竹管と鋸歯状文を器面に施す。口唇部には、1～2cmの帯状の粘土を貼り付け小突起としている。また、④は動物を象形化した把手と思われる。土器の出土量は、最も多い。(酒井)



第24図 出土遺物 (1 1/2, 2~4 1/2)



第25図 出土遺物 (1/4)

縄文時代中期初頭の土器 (第25図1)

新保式〔高堀 1952〕に比定される深鉢形土器の口縁・胴部片がある。前者には、幅の細い半截竹管による斜位格子目文(①~④)、山形文(⑤)を施すものや、縄文地に同種の半截竹管を縦位に引くもの(⑥・⑦)がある。また、後者の文様は、木目状など擦糸文を付すもの(⑧~⑬)が見られる。いずれも器壁は薄く、当時期で通常的に見られる厚手の土器は認められない。

縄文時代中期前葉~後期の土器 (第25図2)

①・②は、同一個体の頸部から胴部の破片と思われる。器形は、円筒形の胴部にやや外反した口縁部が付く深鉢形土器であろう。文様は、口縁部に数条の半截竹管文を横走りさせ、縦位の隆帯・突起で区画し、その間を無文帯とする。胴部は、同じ半截竹管でB字状文・格子目文が施されており中期前葉の巖照寺Ⅰ式〔神保 1976〕に比定される。③・④は、上記の土器と同時期・同器形の胴部片と思われるが、型的には、巖照寺Ⅱ式以降に属す可能性をもつ。

⑤~⑧は、爪形文の刻目を施す隆帯を文様の基線とし、平行・渦巻状の半截竹管文を施す。中期中葉の天神山式〔湊他 1959〕でも新しい時期の深鉢形土器の破片であろう。⑨は、同時期の浅鉢形土器の破片で、口縁部に円形の隆帯文様を貼り付ける。

⑩は、赤褐色を呈する土器で、沈線文による工字状区画内に貝殻腹縁文を施すもので、中期後葉の串田新Ⅰ式〔小島 1964〕に比定されよう。

⑪は、褐色を呈し、器壁の薄い土器片である。棒状工具による区画・刺突を施すもので、新潟県下に見られる後期初頭の三十稲場式に類似すると思われるが判然としない。

縄文時代後期末葉・晩期の土器 (第25図3)

3の上及び下左は、同一個体の破片である。後期末葉のいわゆる井口第Ⅳ期の土器〔橋本他 1980〕に類縁する。器形・文様は、複合波状口縁の深鉢形土器で、頸部がやや外反屈曲する。縄文地(R・L)を持つ口縁部には、二~四条の沈線がめぐり、富士山形の波頂部下位では刺突と八状の縦沈線で切る。また、胴部には、細かい斜縄文(R・L)を施す。

3の下中・右は、条痕を施す晩期の土器片と思われるが詳細は不明である。

(神保)

(2) 石器

出土した石器には石鏃・石錐・块状耳飾・打製石斧・磨製石斧・凹石・擦石・石皿などがある。

石鏃 (第21図1の①～③) すべて無茎である。石質は黒曜石・安山岩・頁岩が用いられている。

石錐 (第21図1の④) 形態は二等辺三角形を呈し、基部はぶ厚く成形されている。先端は摩滅が著しい。

块状耳飾 (第21図1の⑤・⑥) 欠損品であるが、形態は円形を呈すると考えられる。石質は蛇紋岩である。類品は過去の調査でも出土している〔柳井・神保 1975〕。

打製石斧 (第21図2) 形態には撥形と短冊形がある。砂岩と安山岩が用いられている。③と④の表面には大きく自然面が残されている。大きな礫から剥離された剥片が素材として用いられている。

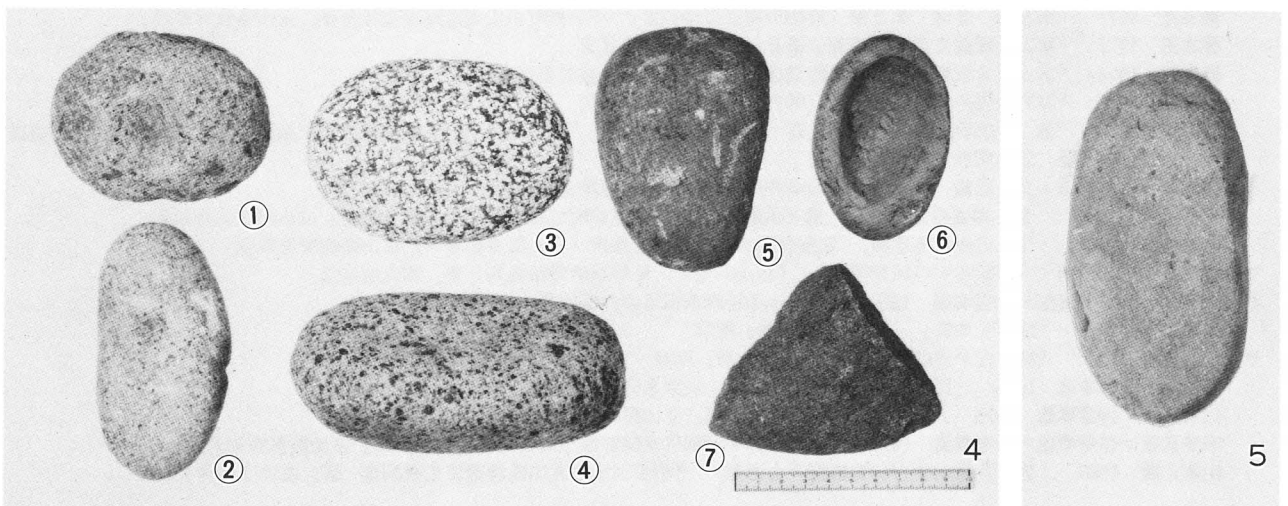
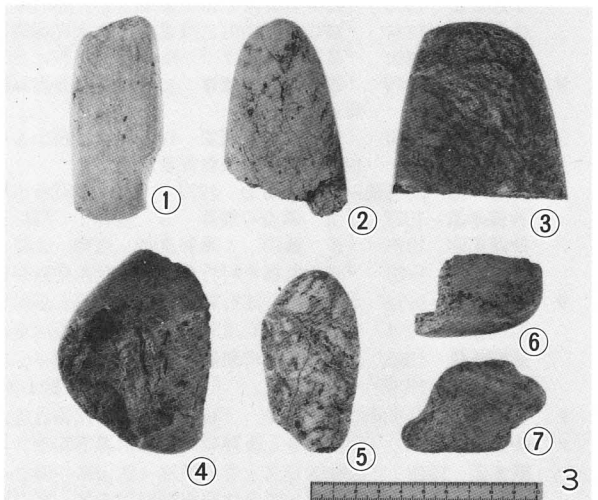
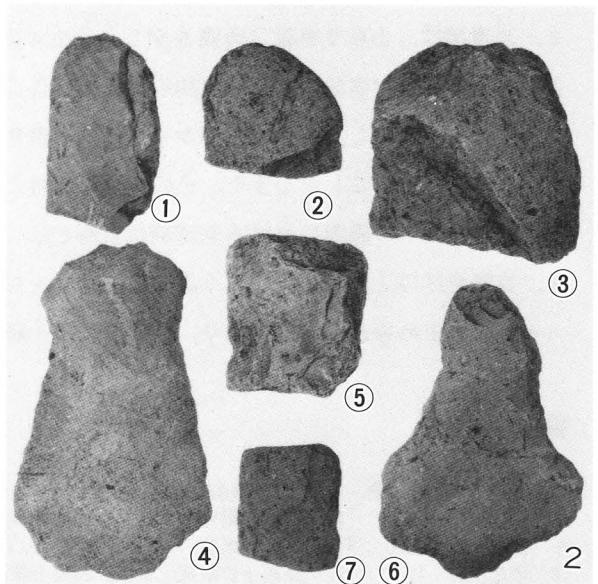
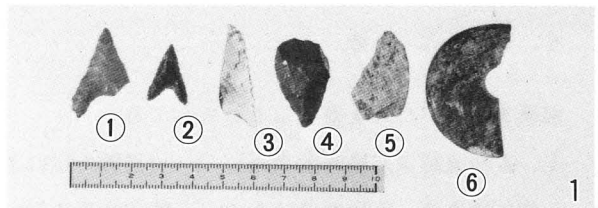
磨製石斧 (第21図3の①～③) 石質はすべて蛇紋岩である。③の表面と頭部には自然面が残されている。円礫が直接研磨・成形されている。

凹石 (第21図4の①・②) 安山岩・砂岩の円礫が用いられている。①は表裏・側面に複数の穴がみられる。

石皿 (第21図5) 表裏両面が浅い窪みとなっている。裏面と側面は砥石に転用され、数条の筋が残されている。

その他に砂岩製の擦切具 (第21図4の⑦), 石ランプと仮称されているもの (同4の⑥), 擦石 (同4の③～⑤), 蛇紋岩円礫の表面に部分的な磨面があるもの (同3の④～⑦) がある。

(奥村)



第26図 出土遺物 (1 1/2, 2~4 1/3, 5 1/6)

4. ま と め

前章まで述べた点を要約しまとめとする。

1. 吉峰遺跡は、県内七大河川の一つ常願寺川によって形成された段丘上に立地する。その所属時代は、先土器時代に始まり、断続的ではあるが、縄文時代晩期におよぶ長期的なものである。
2. 当遺跡は、土取り事業に契機を發し、過去4回に渡って調査が実施され今回が、第5次調査にあたる。
3. 今回の調査対象地は、吉峰遺跡の東側縁辺部にあたり、竪穴住居跡・貯蔵穴・墓穴など明確な遺構は検出できなかった。しかし、遺物包含層からは多量の遺物が出土し、整理を行なった結果、縄文時代早期からほぼ晩期に至る資料を得ることができた。その内、縄文時代前期後葉から末葉の土器は、出土量が多く、また、比較的まとまっており、県内における同時期の資料としては、必要かつ良好な位置付けを持つ土器群と言える。
4. 吉峰遺跡の土取り事業に伴う調査は、今回をもってほぼ完了した。5次に渡った調査の成果は、いずれ報告書としてまとめられる予定であり、今後の整理・研究を待ちたい。(神保)

参 考 文 献

- ウ 上野章・酒井重洋・神保孝造 1976 『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
オ 岡村道雄 1979 「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例—その1—」『東北歴史資料館研究紀要第5巻』東北歴史資料館
キ 岸本定吉 1976 『炭』丸の内出版
コ 小島俊彰 1964 『高岡公園小竹藪縄文遺跡』高岡市教育委員会
小島俊彰 1965 『極楽寺遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
小島俊彰 1974 『富山県立山町吉峰遺跡第3次発掘調査概要』富山県教育委員会
小林達雄 1968 「多摩ニュータウンNo.46遺跡における吹上パターンについて」日本考古学協会発表要旨34
サ 酒井重洋 1979 「Ⅲ 調査の概要 12 法光寺谷古窯跡 13 上末古窯跡」『富山県立山町埋蔵文化財予備調査概要』立山町教育委員会
シ 神保孝造 1976 「Ⅱ 調査の概要 10 城端町西山B遺跡 縄文時代」『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
神保孝造・岡上進一・松本幸治 1977 『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
神保孝造 1977 「Ⅲ 調査の概要 3 遺物」『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
神保孝造 1979 「Ⅳ 遺跡 1 滝谷遺跡、遺物、土器」『富山県婦中町外輪野地区埋蔵文化財予備調査概要』婦中町教育委員会
神保孝造 1980 『富山県福光町竹林Ⅰ遺跡緊急発掘調査概要』福光町教育委員会
タ 高堀勝喜 1952 「珠洲郡松波町新保遺跡の調査」石川考古学研究会々誌第4号
高堀勝喜 1954 「金沢市古府遺跡調査報告書」石川考古学研究会々誌第6号
高堀勝喜 1965 「縄文文化の発展と地域性—北陸—」『日本の考古学Ⅱ』所収 河出書房
高堀勝喜 1970 「原始時代」『七尾市史資料編第4巻』所収
ト 富山大学考古学同好会 1954 『蛭ヶ森貝塚調査報告書』富山県教育委員会
ノ 能登健 1974 「発掘調査と遺跡の考察」信濃第26巻3号
ハ 橋本正 1968 「回転押型土器の問題—富山県の場合—」富山考古学協会々誌 大境第4号
橋本正 1970 『立山町吉峰遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
橋本正 1971 「第3章 遺構 第2節 遺物の埋没について」『小杉町中山南遺跡調査報告書』富山県教育委員会
橋本正 1972 『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』富山県教育委員会
橋本正 1976a 『富山県大沢野町直坂Ⅱ遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会
橋本正 1976b 「竪穴住居の分類と系譜」考古学研究第23巻第3号
橋本正 1978 「Ⅲ 調査の成果 2 先土器・縄文時代草創期」『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第六次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
橋本正・酒井重洋・久々忠義 1980 『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』井口村教育委員会
橋本正春 1979 「Ⅲ 調査の概要 7 竜ヶ浜遺跡」『富山県立山町埋蔵文化財予備調査概要』立山町教育委員会
橋本正春 1981 「Ⅳ 白岩古高遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—立山町遺構編—』富山県教育委員会
マ 松田賢一郎 1980 「常願寺川の河岸段丘」『富山県地学・地理学研究論集第7集』富山地学会
ミ 湊 農・広田寿三郎・大谷清端 1959 『天神山遺跡調査報告書』富山県・魚津市教育委員会
三鍋久雄 1977 「地形・地質」『立山町史上巻』所収
ヤ 安田良栄 1977 「郷土のあけぼの」『立山町史上巻』所収
柳井陸・神保孝造 1975 『富山県立山町吉峰遺跡第4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
山本正敏・神保孝造 1975 『金剛新遺跡発掘調査概要』立山町教育委員会
山本正敏・神保孝造・松本幸治 1978 『富山県婦中町細谷遺跡群第一次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
山本正敏 1980 「Ⅲ 各説 9—10白岩藪ノ上遺跡」『昭和54年度富山県埋蔵文化財調査一覽』富山県教育委員会

遺構名	平面形	規模 (m)			壁高差 cm			主軸方位	主柱本数	炉の状態	炉の規模 (m)		出土遺物	備考
		長軸	短軸	東壁	西壁	南壁	北壁				長軸	短軸		
住-01	長円形	6.70	3.90	30	—	30	—	N-46°-W	6	地床炉単設	0.80	0.25	深鉢形土器 浅鉢形土器 剥片	北壁・西壁削平うける。 南壁に風倒木痕重複。 主軸上に掘り方が漏斗状で規模が63cm×45cm深さ68cmの穴有り。
住-02	長円形	6.60	4.70	6	10	20	—	N-31°-E	8	地床炉単設	0.50	0.40	深鉢形土器 凹石 擦石 石皿 擦切具 剥片	北壁削平うける。 穴-32により切られる。 主軸上に掘り方が漏斗状で規模が96cm×75cm深さ40cmの穴有り。
住-03	方形	4.10	3.50	30	—	10	10	N-70°-W	4	地床炉単設	0.40	0.20	深鉢形土器 石錘 凹石 剥片 土偶	西壁削平うける。 主軸上に掘り方が漏斗状で規模が73cm×63cm深さ48cmの穴有り。 覆土内に大形土器片含む。 穴-23出土の浅鉢と同一個体片有り。
住-04	長円形	6.60	5.50	15	5	20	5	N-32°-W	8	地床炉単設	0.70	0.65	深鉢形土器 浅鉢形土器 石鏃 打・磨製石斧 凹石 擦石 剥片 土偶・耳栓	主軸上に掘り方が漏斗状で規模が115cm×98cm深さ86cmの穴有り。 覆土内に多量の炭粒、焼土ブロック、床面には数個の炭化木があり、家屋が火を受けた可能性有り。
住-05	長円形	6.90	4.00	10	—	5	—	N-71°-W	9	地床炉単設	0.45	0.20	深鉢形土器 浅鉢形土器	北壁削平うける。 西壁に風倒木痕重複。 主軸上にある漏斗状の穴は、風倒木痕のため確認できず。
住-06	長円形	6.90	5.50	25	5	30	15	N-11°-E	8	地床炉単設	0.55	0.35	深鉢形土器 浅鉢形土器 磨製石斧 擦石	主軸上に掘り方が漏斗状で規模が72cm×67cm深さ73cmの穴有り、他に底へ土器を敷き、中で火を焚いた痕跡を残す穴有り。床面の状態、他の住居跡に比べ極めて良好。
住-07	長円形	8.60	6.00	5	5	5	—	N-10°-E	10	地床炉複設	①0.50	0.45	深鉢形土器 浅鉢形土器 磨製石斧 凹石 擦石 土偶	東壁・西壁・北壁削平うける。中央部に風倒木痕有り、主軸上に掘り方が漏斗状で、規模が101cm×90cm、深さ67cmの穴有り。他に規模100cm×110cm、深さ30cmの穴有り。住-07以外に住居跡重複の可能性残す。
											②0.55	0.45		

遺構名	平面形	規模			出土遺物	備考
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)		
穴-01	長円形	1.50	1.20	26	—	覆土内に若干の礫混入する。
穴-02	円形	0.55	0.55	40	—	—
穴-03	円形	0.70	0.70	25	剥片	住-02と近接しており、その関連性を考慮したい。
穴-04	円形	1.58	1.00	48	深鉢形土器	風倒木痕の一部か、黒色の覆土内から土器片出土。
穴-05	円形	1.20	1.00	29	—	—
穴-06	円形	1.80	1.80	48	深鉢形土器	側壁面が焼けており、伏焼法による簡素な炭焼用の竈跡と考えられる。主軸 N-24°-W
穴-07	不整形円形	1.00	0.45	10	深鉢形土器	2個の穴が重複か。
穴-08	長円形	0.75	0.40	24	深鉢形土器	—
穴-09	長方形	3.24	1.24	17	—	北壁削平。覆土内に多量の炭粒。焼土ブロック含む側壁面が焼けており、伏焼法による炭焼竈跡と考えられる。主軸 N-82°-W
穴-10	円形	0.75	0.70	18	—	袋状ピット。住-03と近接しており、その関連性を考慮したい。
穴-11	—	—	—	—	深鉢形土器	木の根跡と判定。
穴-12	—	—	—	—	—	木の根跡と判定。
穴-13	—	—	—	—	深鉢形土器	—
穴-14	方形	1.95	1.50	74	—	袋状ピットか。
穴-15	長円形	0.70	0.60	37	深鉢形土器 浅鉢形土器	覆土内に大型の土器片あり。
穴-16	—	—	—	—	—	木の根跡と判定。
穴-17	円形	0.25	0.24	19	—	—
穴-18	円形	0.45	0.40	42	深鉢形土器 剥片	—

遺構名	平面形	規模			出土遺物	備考
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)		
穴-19	円形	0.50	0.45	31	深鉢形土器	—
穴-20	円形	0.40	0.32	33	深鉢形土器 石鏃 石核	—
穴-21	長円形	0.66	0.55	14	深鉢形土器	—
穴-22	円形	2.13	2.05	5	石鏃	黒色の覆土内に多量の円礫が混入する。集石遺構か。
穴-23	円形	1.37	1.35	36	深鉢形土器 浅鉢形土器	大型の円礫が数個はいる、住-03出土の浅鉢と同一個体有り。
穴-24	長方形	2.52	1.67	14	—	覆土内に炭粒、焼土ブロック含む。側壁面が焼けており、伏焼法による炭焼竈跡と考えられる。主軸 N-12°-W
穴-25	円形	0.21	0.21	15	深鉢形土器	—
穴-26	長方形	1.70	1.10	46	深鉢形土器 剥片	—
穴-27	円形	0.88	0.87	23	—	—
穴-28	不整形円形	1.02	0.66	12	—	—
穴-29	不整形円形	0.79	0.35	26	深鉢形土器	2個の穴が重複か。
穴-30	長方形	4.25	1.80	28	深鉢形土器	覆土内に多量の炭粒・焼土ブロック含む。側壁が焼けており、伏焼法による炭焼竈跡と考えられる。主軸 S-9°-W
穴-31	円形	0.38	0.29	29	深鉢形土器	—
穴-32	円形	0.62	0.58	7	深鉢形土器	住-02と重複する。
穴-33	円形	0.30	0.30	28	—	数個の穴と重複か。
穴-34	長円形	0.67	0.50	10	石皿	石皿を裏返しにし、伏せる
穴-35	円形	0.55	0.45	18	—	住-02に隣接。

表1 白岩敷ノ上遺跡遺構計測表



付図1 立山町白岩藪ノ上遺跡遺構分布図

0 10 20M

富山県

立山町埋蔵文化財

緊急発掘調査概要

白岩薮ノ上遺跡

吉峰遺跡

発行日 昭和56年3月31日

発行者 立山町教育委員会

編集者 酒井重洋・神保孝造・奥村吉信

印刷者 (有) 日本海印刷